快晴のち雪の空

東堂冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
快晴のち雪の空

【Ｎコード】
Ｎ５６３９Ｕ

【作者名】
東堂冴

【あらすじ】
ｐｉｘｉｖでも連載中。「ソフトテニスなんかマイナーだ」「弱ぇくせに偉ぶるな」。とある公立高校の、平凡な硬式テニス部キャプテンと、強豪のソフトテニス部キャプテンのお話。――嫌いな奴は、嫌いなままでいられるのが一番幸せだ。　見事に男しか出てこないので、ＢＬの意図はありませんが敏感な方は注意してください。

大嫌いにも程がある

つーかさ。空に浮かぶ雲の白色が、見事なまでに青に融けて調和していた。そんな秋空の下で透明な空気を揺らしたのは、それに似つかわしくないあからさまに不機嫌そうな声色。その、透明とはほど遠い声を発したそいつは、テニスコートとその外を遮る緑色のフェンスに寄りかかった。ぎしり、と音をさせて、かけられた体重に鉄のフェンスが呻きを上げる。足下に転がる黄色い硬式のボールを拾い上げて左手で弄ぶそいつには、蛍光イエローがひどく似合わなかった。

「俺等センターベルト使ってねぇのに、なんで留めて帰んなきゃいけねぇわけ？　俺等は使う前に外して終わった後に留めて、硬式は何もしねぇで使えんの、すっげぇ不条理じゃねぇ？」

スピンをかけて、黄色いボールは空中に投げられた。手元を一切見ないままそれを綺麗にキャッチして、ボールを持ったまま横柄に腕を組む。そのまま足を前に投げ出して、そいつは苛立ちを孕んだ表情で俺を見下してきた。身長差はたったの五センチだけれど、その指二本分は態度に比例して大きく見える。言い返そうと口を開きながら睨み付けた、自分が上位であることを一瞬たりとも疑わない冷たい眼光は、いつもと同じに空と対極の水色をしていた。

「んなこと言われたって、使ったら元の形に戻すのが当然だろ」

当たり前は当たり前、だから当然のことくらいちゃんと守れ。それは何度もこいつにぶつけた言葉なのだけれど、いつだってその「当たり前」を覆そうと言葉を重ねられる。そんなもはや討論にもならない言い合いを、代替えをしてから俺たちは数えるのも嫌になるくらい何度も繰り返してきた。

抑えきれない溜息を漏らして嫌々目線を合わせれば、同じく機嫌の悪いあっちは俺の言葉にあからさまに眉を顰めた。話にならないと首を振ったそいつの、日の光に焼けた濃い茶色の髪が白いサンバ

イザーの上ではらりと揺れる。
「まあ、お前らみてぇな弱小部になに言われたって、なあ？」
「は、黙れよマイナースポーツのくせに」
ソフトテニス部キャプテン、雪谷君人。俺は、こいつが大嫌いだ。

「ハル、ネット上げといて」
「おう」
正式に部活を始める前に自主練をしようと副キャプテンの坂野に声を掛けたら、いつも通り二つ返事で了承された。いつもの開始時刻より少し早めに着替えをすませ、まだ誰もいないテニスコートの外側を覆うフェンスのドアに手を掛ける。古びた鉄のこすれる音は、最初の頃は不快だったけれど半年もすれば慣れてしまった。
ボールの準備にとりかかった坂野に声を掛けられて、俺は右手にラケットを引っ提げたままネットに向かった。ブラシを掛けて慣らされた土のコートに、テニスシューズの足跡が微かに浮かび上がる。手にのし掛かった鉄のクランカーの重さも、随分長い間知ったものだ。それを使ってネットに通されたワイヤーを巻き取って、だらりと弛緩したネットに骨を通す作業なのだけれど、クランカーを回すのは意外に力仕事だ。ネットの高さを見ながら重くなってきた右手に体重をかけて、ふと気が付いた。こっちの端から向こうの端まで、まったく同じ高さのネット。それはひどく、不自然なこと。
「うわ、」
視線をずらしてネットの真ん中に目をやると、案の定予想は当たっていた。ネットの真ん中下部だけを地面に固定して、中央の高さを両端より低くするためのベルト、――センターベルトの留め具が、外れていた。普段は地面にフックで留められていなければいけないのに、それが外れてフックはベルトの先でぶらぶらと宙に浮いていた。なんで、なんて理由は考えるまでもない。
「ハル？」
「あの野郎、いい加減にしろってこの前も言ったのに」

「何の話……あ、センターベルト？　あー、隣も外れたままだな」
「あいつ人の話聞く気ねぇ、ぜってーねぇ」
「まあ、ないだろうけど」
あいつ、お前の言うこと聞いたことねぇじゃん。あっさりと肩を竦める坂野の言葉があまりにその通りだったから、無性に苛ついてネットのポールを右脚で蹴りつけた。鈍い痛みが自分の脚に返ってきたのと同時に、後頭部にも同じような衝撃が走る。いて、と声を上げて振り向けば、坂野は左手でラケットを掲げていた。ラケットヘッドで軽く頭を殴られたことに、気付くのにそう時間はかからなかった。物に当たるな。正当な説教に、自分が悪いのはわかっているけれど溜息が漏れた。
仕方なくもう一度クランカーを手に取り、逆に回してベルトが地面に付くまでネットのワイヤーを緩めた。坂野が留め具を付けてくれたのを確認してから、今度はまたその逆回しをして、ようやくネットを正しい形で張るに至る。いつもいつもこのやりなおしに時間と言い気力と言い、損をした気がして気分が悪い。最近、というよりもあの野郎がキャプテンになってからよくある出来事だ。
ベルトが付いてない理由は簡単だ。昨日このコートを使った奴等――ソフトテニス部の部員が、終わってネットを下げた後にベルトを留めていかなかったから。俺はソフトテニス（硬式テニスとの対比で、俺たちは「軟式」と略して呼ぶのだけど）には詳しくないけれど、あいつらはネットを張る時にセンターベルトを使わない、らしい。要するに、軟式として正しいのは、端から端まで同じ高さの、あのどうにも気持ち悪いネットの張り方であるようだ。詳しくないというよりは、軟式になんて興味がないからつい最近まで知らなかっただけ、という方が正しいのかもしれない。なんにせよ、どうして軟式の奴等がベルトを留めないのかというと、だ。軟式のキャプテンが、そんなことしなくていいと部員に言い渡しているから。ふざけてる。としか思えなかった。
つまりは、今日の喧嘩の発端はそれだった。その後もう一カ所の

コートに行くために、フェンスの外を歩くあいつを発見して、今日喧嘩を売ったのは俺だけどあいつだって買ったわけだ、文句は言わせねぇ。

「元の形、が硬式用ってなんだよ。自分達がスタンダードだって？」
「どこのコートだって、設備は硬式用だろ」
「軟式が妥協してやってんだろ。軟式のコート硬式用には出来ねぇから、仕方なく」
　ああ言えばこう言う、とはまさしくこいつのためにある言葉だと思う。よくもまあ、次々にそんな切り返しばかり浮かぶものだと思わず感心に似た感情さえ覚えてしまった。大して背が高いわけでもないのに（かといって低いわけでもないけれど）、見下してくる視線に腹が立つ。雪谷が指先で転がしている黄色いボールに目を逸らしてから、俺は自分の額にある紺色のサンバイザーを指で押さえて口の端に嘲笑を作る。太陽を遮って、そのまま見上げ直した。
「マイナーだから専用コート作る価値もねぇだけだろ、軟式なんて」
　こいつはいつだってそうだ。いつもいつも、軟式なんてマイナースポーツのくせに硬式の俺等のことを見下してくる。その横柄で利己的な態度が、最高に気に食わねぇわけだ。偉そうな口を利いて、上からな視線にまた苛々が募る。
「軟式がマイナーなことは否定しねぇよ。だけど、だからってお前らみてぇな弱小部に馬鹿にされる筋合いもねぇし。関東にも行けねぇくせに、何偉そうなこと言ってんだか」
「コート整備に強いも弱いも関係あるか」
「メジャーかマイナーかは関係あんのか？　ばーか」
　安直な罵り言葉を投げ出して、馬鹿にするように笑みを乗せた表情の浮かんだ顔を、また雪谷の投げ上げたボールが一瞬覆った。俺の表情を伺って、自分の優位性を崩す気が毛頭ないことを動作のひとつひとつではっきりと示してくる。
　こいつが俺達を見下してくる理由は、硬式より軟式の方が公式大

会での成績がいいという確固たる事実があるから。確かに、俺達硬式が決して強い部でないのは事実だ。反面、軟式は去年――というより、こいつが試合に出だしてから、主たる大会では上位の常連。公立高校のトップレベルどころか、強豪の私立とさえ張り合うほどの成績を収めている。その差は否めない。だけど、だからと言って。こんな、マイナースポーツやってる奴等なんかに。

「馬鹿はどっちだよ」

「てめーだろ、猿山の大将。俺なんか間違ったこと言ったか？　硬式が不利なようにコート整備しろ、なんて一言も言ってねぇだろ。練習始める前に、ベルト留めるなり外すなりして、終わったらそのまま。それで不公平ねぇだろ？　硬式が有利でいられんの当たり前だと思ってんじゃねぇよ。俺がキャプテンやってる限り、軟式と硬式に差は付けさせねぇ」

　出てくる言葉は、文句の付けようがないくらい正論だった。だけどそれはどうにも屁理屈にしか思えないわけで、きっとその原因はこいつの視点と視線だ。平等を謳うふりをして、やっぱり見下してくる。

「俺達は、別に軟式がむかつくからセンターベルトさせてたわけじゃねぇし、昔からそうだったからそうしてただけだぜ？」

「それが？　やってもらってて当たり前だったことに対して、なんかねぇの？」

「不条理だとかんな理由の前に、ただ単純にお前が硬式が嫌いなだけなんだろーがって話だよ」

　こいつが喧嘩を売ってくる理由は、突き詰めてしまえば毎回そればかりだ。正論は正論、だけれどその裏の感情がこれだから、しかもそれを隠そうとすらしないから、はいそうですね、なんて絶対に言えないし言ってやらない。俺が軟式を嫌いなのはこいつがいるからで、こいつがここまでむかつく奴でなければ軟式になんて興味もない。だけれど。

「その通り、だけど？」

雪谷は、最初から俺達硬式テニス部が、硬式が大嫌いだ。
「んなわけわかんねー理由受け入れられれっかよ」
「動機はどうあれ、俺は正論言ってるつもり。絶対的に硬式が優位だなんておかしいだろ」
「平等平等って、結局そう言って硬式より軟式の方を上に持ってきて俺達のこと見下したいだけなくせに」
、こいつはいつだってそうだ。硬式を馬鹿にする態度はあからさまで、清々しいほどの上から目線で俺のことも硬式のことも見下してくる。自分は間違っていないを盾にして、自分の正義をためらうことなく押し通してくる。それが、こっちにとってそうでないことを完全に理解していながらだから、タチが悪い。雪谷は短く声を上げて笑って、俺がついさっきしたのと同じようにサンバイザーに指をかけた。
「当たり前だろ」
秋風が髪とユニフォームを揺らした。その音と同時にきっぱりと、一言発される。ようやく組んだ腕を外して、寄りかかったフェンスから体重を自分の足に乗せた。最高に腹が立つ嘲笑を浮かべて、雪谷は左手の黄色いテニスボールを弄びながら右手の中でラケットを回した。硬式のラケットよりも細身な、見慣れてしまった水色のそれは、驚くほどに雪谷の持つ水色と同じ色をしている。凍傷を起こしそうに冷たい、空色と水色のちょうど間、空を落とし込んだ雪の色だ。
「扱いがまったく同じなら、大会での成績がいい方が上位だろ？それが、当たり前。違ぇか？　鈴木晴也」
反論しようとしても、もう言葉は出てこなかった。なにもかもに腹が立った。言葉に視線に態度に、わざわざフルネームで俺の名前を呼ぶ声にも、すべてにただ苛ついて、だけど苛々にかき混ぜられた頭では言葉が探せない。言い返せない俺を馬鹿にして笑うこの姿にも腹が立って、脳内が更にぐちゃぐちゃになって、何がどこにあるかわからなくなってきてしまう。

「ハル、雪谷。お前等いつまで喧嘩してんだ」
きい、とあの音を立ててフェンスのドアが開いた。呆れたような声が聞こえてそちらを見たら、腰に手を当てて坂野が溜息をついていた。もう部活始まってんぞ。言葉と共に突きつけられた腕時計は、すでに開始十分後を指し示していた。
「お前等が仲悪ぃのは知ってっけど、キャプテンなんだからちゃんと仕事しろ。軟式も今日部活あんだろ、雪谷？」
「……悪ぃ」
坂野に諭されて、雪谷は一瞬だけバツの悪そうな顔を見せた。溜息をついてフェンスから離れ、ずっと左手の手遊びに使っていた硬式のボールを、逆回転を掛けて俺に向かって投げつける。慌ててラケットで拾い上げようとしたら、ボールはラケットのフレームに当たって地面に落ちた。それを何度か面で叩いて浮き上がらせ、掬ってからもういちどあいつの姿を見たら、雪谷はまた俺を笑っていた。さっきのほんの少し殊勝そうな表情はどこへやら、どうしようもなく苛立つ顔で。
「せいぜい、いい加減関東行けるように頑張れよ。猿山の大将」
「うっせぇ、地区大会で一回戦負けしてろ！」
ラケットを握って反対側のコートへと走っていく後ろ姿に、大声で叫んだ。坂野が後ろでもう一度溜息をついたのが聞こえて、その後ラケットで頭を叩かれたのは今日二度目だ。「レベル低すぎんだろ」と言われてしまっては、ぐうの音も出ない。
「お前等相っ変わらず仲悪ぃのな」
「雪谷と仲良くなんか、出来るわけねぇだろ」
ソフトテニス部キャプテン、雪谷と書いて「ゆきがや」と読ませるふざけた苗字。嫌味で偏屈で屁理屈ばっかり持ち出してくる、苗字と同じ捻くれた奴。実力的にひとりだけ飛び抜けた、軟式のエース。
「ほんっと、腹立つ」
俺の、今のところ世界で一番嫌いな奴だ。

慇懃無礼で自信過剰

今でこそ散々硬式のことを弱いと馬鹿にしてくるけれど、雪谷が入部するまでの軟式は特に目立って強かったわけではなかった（もちろん俺がその時期を知っているわけはないけれど、先輩たちによると）と聞いている。かと言ってどうしようもなく弱かったわけでもないけれど、夏は何人かが都大会に出て、たまに関東に出れるレベルの選手がいることもある、とそれくらいだったらしい。丁度、今の俺たち硬式と同じくらいだ。

「第八位、橋本・雪谷ペア。右は、秋季関東大会にて頭書の成績を収めたことをここに賞し――」

朝礼で校長が、全校生徒の前で賞状を読み上げた。壇上には雪谷の後ろ姿があって、学ランの黒色に、長い間日に焼け続けて、自然と色素が落ちたのであろう焦げた茶色の髪が目立っていた。首に掛かる髪は、一般的にはまだ長いとはいわれないレベルだけれども、トッププレーヤーの中では珍しく思える。それでもこのとてもよろしい性格をしている軟式キャプテンは、何だかんだ平均よりは遥かに見目がいいのだから、神様なんて存在は本当に不公平だ。

関東大会八位。基本的に俺たち公立生は、私立の学校にはそうそう簡単には勝つことが出来ない。選手の層の厚さも、練習環境や量、かけられる費用まで段違いなのだから、仕方ないと言ってしまえばそれまでだ。それをかいくぐって東京代表を獲得したところから驚くべき快挙で、それどころか硬式もそうだけど軟式には正規のコーチが居ないと聞いている。詳しく知っているわけではないけれど、そんな環境でのこの成績は普通だったら奇跡でも足りないほどだ。

けれど、壇上でペアと共に賞状とバッジを受け取った雪谷はどこか釈然としない表情をしていた。この距離と角度からは伺えないけれど、いつも俺に向けるあの水色よりももっと冷たく濃い色を思わせる瞳が、横顔の向こうにあるのだろう。あいつは満足なんかして

いない。俺が見てすらわかるほど、憮然とした顔で雪谷は校長に頭を下げた。ペアの片割れが、眉を寄せて微妙な顔をしていたのも、雪谷のせいだったのだろうか。回れ右をして、並んだ生徒側を向いて浅い礼。割れんばかりの拍手を受けても、雪谷は愛想笑いひとつ見せなかった。とりあえず、その顔を見るのさえ腹が立つから壇上から目を背けた。当然、手なんか叩くわけがない。

雪谷は、名実共にソフトテニス部のエースだ。それどころか、有名な運動部もろくにないこの学校では、運動部全体のエースと言っても過言ではないくらいで、少なくとも運動部の星として全体で三本の指には入るだろう。名字が珍しいのもあるだろうけれど、うちの学校で「雪谷」の名前を聞いて、ソフトテニス部を思い出さない人間はかなりの少数派だ。文化部でも帰宅部でも、学年が違っても大抵の人間が雪谷のことを知っている。今の一年には、雪谷に憧れてうちのソフトテニス部に入ろうとこの学校を志望してきた奴までいるのだと、坂野含むうちの部の奴等から話だけは聞いていた。

俺は軟式はやったことがないけれど、雪谷のテニスは何度か見かけたことがあるし、一度しっかりと見てしまったことまである。軟式のコートの前を通りかかったら丁度雪谷たちが試合をやっていたから、つい気になってフェンス越しに覗いてみてしまったわけだ。

先輩たちが引退して、俺や雪谷がキャプテンになってすぐの頃、八月の暑い日だったことまで覚えている。融けてしまうんじゃないかと思うくらいの炎天下で、立ち止まるった時に吹き出る汗が気持ち悪かったから、クーラーの効いている校舎までは歩き続けようと思っていたところだった。けれど、ふと雪谷のプレーが目に入ってしまって、気が付いたらフェンスの前で思わず見入ってしまっていた。相手の足下、バックハンド側にピンポイントで落ちる見事なアプローチショット、軟式の打ち方やボールの飛び方なんてまったく知らない俺でも綺麗だとわかるほどの軌道を描く、小気味いい音でラケットに当たったローボレー。最後に叩き込んだスマッシュが、

ゴムボールだとは思えないスピードでコートの空いた場所に突き刺さったところまで、まったく目を離すことが出来なかった。雪谷はそのポイントを全て一人のプレーで取っていた。シングルスコートよりずっと広いダブルスのコートを駆け回って、雪谷の打つボールは、全て見事にラケットの真ん中で捉えられていた。

水が流れるのを見ているかのように、あまりによどみがなさ過ぎて、すごさを実感するまでに時間がかかってしまった。するりと流れていってしまって、それが抉った空間は暫くぽっかりと空虚に空いたままだった。それから、そこに最初に流れ込んできたのが感嘆と感動で、ほんの少し後には全て嫉妬で埋め尽くされた。そのことに気付いて、俺はようやく軟式のコートの前から離れることが出来た。

軟式の打ち方も、ルールも、硬式とどこが違うのかはよく知らない。だけど、動き方も足の運び方も、同じテニスだから知っている。雪谷がどれだけうまいのか、軟式の中でどれだけずば抜けているのかも俺はわかってしまった。そして、悔しかったのはそれだからだ。俺は、こいつには並べない。それを顕著に、自分の目で見て確かめてしまったから。土俵が違うとしても、比べるだけ無駄なのをわかっていたとしても、どうしてもあのプレーがちらついてしまう。硬式と軟式はきっと違うスポーツだと思うべきなのに、そう思うにはあまりに似ているのだ。俺を下手だと馬鹿にしてくる雪谷に、俺はなにも言葉を返せない、返すための実力が確かに俺にはない。それを、突きつけられたことが、どうしようもなく悔しかった。

雪谷が高校軟式の中でどれくらい強いかと聞かれたところで、俺はそれに関してはまったく詳しくない。ただ、データとして知っているのは、あいつは去年の秋の新人戦には出場しなかったけれど、突如出た秋の終わりの一年生大会で優勝したこと。それと、そこからコンスタントに勝ち続けて、二年にして三年の先輩とと組んで今年のインターハイに出場した、なんていうとても仰々しい成績を収めている、ということ。一年生大会優勝の時も相当騒がれたけれど、

インターハイ出場で雪谷は一気に有名人になった。いくら三年生と組んでいるとはいえ、去年まで関東にすらろくに行けていなかったソフトテニス部の二年生が、インターハイに出場するなんていうのはとても信じられないことだった。加えて、その夏軟式は団体でも都大会を勝ち上がって、ぎりぎりとはいえ関東大会の出場枠を手に入れていた。雪谷が軟式を強くしたというのは、もはや疑いようもない事実だ。

とにかく、あいつはべらぼうにテニスがうまい。それは認めざるを得ないのだけど、性格の方は最悪なことも本当だ。人を見下すのが趣味なんじゃねぇかと思うくらい、あいつのそもそもの基本スタンスが上から目線だ。俺達がなにをしたわけでもないのに硬式を毛嫌いするし、会えば会っただけ嫌味を投げつけてくる。軟式にはシングルスがなくてダブルスだけだという話は坂野から聞いていた（坂野は軟式上がりらしいという話を入る時に聞いた）のだけれど、あいつがどうしてダブルスなんか出来るのか俺にはさっぱりわからない。俺はシングルス専門だから、ダブルスのこともよくは知らないけれど、ペアとのコンビネーションが大事なんだろう、ということくらいは想像が付く。雪谷に協調性なんてどう見たって欠片もなさそうで、コンビネーションなんて言葉はあいつにひどく似合わないような気がした。それこそ、空の爽やかさととあいつのイメージカラーくらいには。

部活後の部室に、着替えた後も坂野と二人残っていた。最近それなりに好調な坂野たちと対照的に、俺はずっと調子が悪くて思うように打てない状態が続いている。ほとんどダブルス専門みたいな坂野を相手にしても仕方ないのかもしれないとは思ったけれど、ただ愚痴のように話を聞いてもらっていた。ぼろぼろな中、なんとか出場を決めた都大会はもうすでに明日まで迫っている。相変わらず調子はよくない、なんて言ってしまったらもうそれが実力だと言われても否定は出来ない。

中学の時の方が、今より打てていたんじゃないかと思うくらいに、高校に入ってからずっと成績も実感も低空飛行だ。最近は本当に、ひどい時は地区大会で負けてしまったりするくらいに、キャプテンとして信じられないくらいに勝てていない。どうして、もわからないほど、調子の悪さはずっと抽象的だ。なにかが足りない気がしているのはわかっているけれど、その何かがどうしても見つからない焦れったさがずっとどこかに巣くったままじりじりと阻害されている気分に陥ってしまう。

それでもこの部で一番強いのは未だに俺なのだから、俺が強くならないと部も強くならないのはわかっているつもりだ。あいつは、あんな成績だったのに。そんなことを引き合いに出して、比べるだけ馬鹿らしいのはわかっている。だけれど、どうしても考えてしまうことだった。どれだけ進んだとしても、俺たちはいつも都大会で負ける。

「坂野」

一通り弱音を吐き尽くしてすっきりしたところで、坂野の名前を呼んだ。ふと、気になったことがあった。

「どうした？」

「坂野ってさ、中学軟式だったんだよな」

「そうだけど？」

なんで？　聞きかけた坂野が口を噤んで言い直した。「雪谷の話か？」とどんぴしゃりで当てられて、認めるのは癪だったけれど頷いた。

「雪谷って、中学時代どんくらい強かった？」

今あれだけの成績を収めているのだから、きっと中学時代も活躍はしていたのだろう。そのことにふと思い当たった。坂野は中学時代、地区が同じだったとのことで雪谷のことを意外とよく知っていた。首筋の後ろに手を当てて、坂野は首を反らせて目を閉じた。

「すっげえ。地区とか都大会であいつのとこと当たったら、運が悪かったな諦めろ。って言われてた。あいつのペアかなり有名だった

しな」
「そんなに？」
「あれ？　ハル知らねぇの？　雪谷、中学時代全国四位だぞ」
「よん、……っ」
　絶句した。強いだろうとは思って聞いたのだけれど、まさかそんな答えが返って来るだなんてそこまでは考えなかった。驚いたように目を丸くして、「知らなかった？」と聞かれたから頷いた。初耳だ。だって俺は軟式になんか興味がなかったのだから、軟式で有名な奴だの成績だのを知っていたわけもない。四位。全国で、日本の中学生の中で四番目に強い。
「校内でも結構有名だったぞ？」
「そうなの？」
「あーまあ、軟式やってた奴に、だったのかもしれないけど」
「全然知らなかった」
　高校に入ってからの成績は噂としても、硬式の中でも有名だったことだけれど。雪谷の中学時代の話を、少なくとも俺はひとつも知らない。けれど、もうこれ以上知りたくもないと思ってしまった。思った以上に、途方もなかった。
「今は固定ペアいねぇから、そこまで全力出せないんだろうけど」
「固定ペア？」
「あいつ、いっつも違う奴と組んで試合出てんだろ」
　そこまで気にして見ていたわけではないから細かいことはあまり覚えていないけれど、言われてみれば、確かに朝礼で何度か表彰された時、雪谷の隣にいる奴は毎回違ったような気がする。少なくとも、今日一緒に立っていた奴と、この前の大会で表彰された時の奴は違っていたように思えた。
「結構いいとこまで行く時は、翔太と組んでるの多いみてぇだけど」
「誰それ」
「橋本。今日雪谷の隣に居た奴。あいつも中学時代関東とか出てたくれぇには強かったらしいから」

「あー、軟式の副キャプ？　お前と仲いいよな」
「キャプテン同士が仲悪ぃからだよ」
何気なく言ったら、頭をはたかれた。坂野と軟式の副キャプテンは、俺と雪谷とは対照的にわりと仲が良い。「お前たちが俺たちの心労を増やすから、苦労話で気が合うんだよ」と言われてしまえば、謝る以外の選択肢もなかった。
「なんで毎回ペア変えてんの、あいつ」
ダブルスでんなことってあるのか。坂野に聞いてはみたけれど、返ってきたのは「雪谷くらい強ければあるんじゃねぇの」なんて微妙な返事だった。恐らく坂野もよくは知らないのだろう、その話はそこで立ち消えた。あいつのことなんか、長く考えているだけむかつくだけだからその方がいい。
「……明日、都大会か」
沈黙が続いて、思わず一言呟いた。心臓の奥の方にありそうなもやもやは、どれだけボールを打っても話を聞いてもらっても、やっぱり取りきることは出来なかった。坂野は俺の言葉を聞いてから、一瞬目を丸くして笑った。「なに緊張してんだ」と、おどけたように坂野は言ってみせた。もやに的確な名前を付けられてしまって、見透かされていたことを認めざるを得なかった。
「俺も、関東行きてぇ」
関東まで、あと一歩。いや、二歩くらい。どれだけ頑張ったところで、俺がいけるのはいつもそこまでだ。酷い時には都にも行けずに負けることもあるし、どれだけ良くたってやっぱり中学から今まで、関東には手が届いたことがない。もう二年の秋だ。チャンスが残り少ないことはわかってる。わかっているからこそ、焦ってしまう。
「行けるよ、お前なら」
坂野が舌に乗せたのは、根拠のない言葉だった。大会が、怖くて苛ついてぐらぐらしていて、馬鹿みたいにいらいらしている自分に気が付いた。大会を除いてしまえば、苛々の原因の八割方はあいつ

のせいなのだけれど。理屈抜きで真っ直ぐ向けられたその言葉に、ほんの少しだけ救われた気がした。

「……うっわ」

「てめぇ人の顔見るなりなんだよその反応」

そろそろ帰ろうと部室のドアを開けた途端、今一番会いたくない奴がドアの外にいた。最悪だ、なんでこのタイミングで、とあからさまに嫌な顔をしたら、向こうも眉を顰めた。部室棟の同じ階、軟式と硬式の部室は隣り合わせだ。軟式の方が一つ奥だから、階段へ向かうのにこいつは俺達の部室の前を通る必要がある。そこで、見事に出くわしたわけだ。このパターンの邂逅はこれが始めてではないけれど、いつだって気分は悪い。

「帰り際にお前見るとか、なんかの前兆っぽくて最悪なんだけど」

「おー、その調子でいつも通り都大会負けとけよ」

ラケットバッグを担ぎながらへら、と笑って一言。その言葉に、いらっと来ないわけがなかった。今一番、何よりもこいつに見られたくなかった触られたくなかった場所を、無遠慮に踏み荒らされた気分に包まれて、苛立ちが増幅する。なにか言い返そうとしたら、後ろから坂野に「落ち着け」の言葉と共に溜息をつかれた。

「雪谷」

「悪ぃのこいつだろ」

「そうだけど、今はあんま言わねぇでやって」

後ろから俺の背中を押して部室から追い出し、坂野はドアに鍵をかけた。いつもいつも、俺らが険悪になるたびに坂野が間に入ってくれる。坂野は、軟式上がりだからかそこそこ雪谷と仲が良くて、雪谷も坂野の言うことにはあまり刃向かわない。俺にだったら、ことごとく噛みついてくるというのにだ。

「軟式は相変わらず強ぇな、関東八位だって？　すげぇじゃん」

「すごくなんかねぇよ。あの組だったら準決勝まではいけたはずなのに」

最近調子悪くて駄目だ。坂野の言葉に、雪谷は溜息を返した。壇上での釈然としないあの顔は、やっぱり不完全燃焼の表情だったようだ。俺は何も言えないし、こいつらの会話に口を挟むこともできない。だって、俺は雪谷に向かって悪口と嫌味と八つ当たりしか、それだけしかできないから。

「おい、鈴木晴也」

だから、唐突に名前を呼ばれて驚いた。鈴木、って苗字があまりに当たり前すぎるからなんて理由で、こいつは大概俺をフルネームで呼ぶ。ここには俺と雪谷と坂野しかいないというのに、今もだ。それは、むしろ利便性というよりはやはり雪谷の上から目線な態度の一部であるように思えてならない。

「なんだよ」

睨み付けた目、いつもより見上げる角度が少ないのは、気のせいかそれとも。雪谷はラケットバッグを担ぎ直して、一瞬目を伏せた。水色が、なかなか見えないことに気が付いた。

「俺は関東より下の大会ではぜってぇ全部優勝するし、団体だって来年の春には関東と全国に連れてく。俺がいる限り、何があってもだ」

「……いきなり、何が言いてぇの」

初めてかもしれないくらいの、嫌味のない言葉だった。こいつにとっては俺に向けた嫌味で当てつけなのかもしれないけれど、それはひどく真っ直ぐで、雪谷の真ん中から皮肉で装飾されずにそのまま出来てきた言葉のように思えた。自分の強さをまったく疑わないその言葉と、それを発することの出来る雪谷を、ほんの少しだけ羨ましいと思った。こんなことを、宣言できるほどの実力が確かに雪谷にはある。嫉妬していたのは、随分前からだ。認めたくなかっただけだ。

「そんだけ」

じゃーな、無駄だと思うけど頑張れ。雪谷はそう言って、俺等の横を抜けて部室棟の階段を降りていった。降りる靴の音が暫く聞こ

えて、段々と夕方の空気に吸い込まれていって、やがて無音が訪れた。唖然と呆然にとり囲まれる。「どういうことだ？」と、俺と一緒に黙ったままの坂野に聞いたら、坂野は肩を竦めて面白そうに薄く笑った。

「あんな自信家で不遜なキャプテンだから、丁度いいのかもな」

「どういう意味だよ、それ」

「まあ、ハルはそのまんまでいいんじゃねぇかな」

「だから、どういう意味だって」

聞いたけど坂野はただ笑うだけだった。ほら、帰るぞ。と俺の頭に手を置いてから、階段に向かって歩き出す。こいつが俺をガキみたいに扱うのは今に始まった事じゃないから、それに反抗するのはもう随分前に諦めてしまった。

秋の夕方は、もう涼しいと寒いの中間の気温だ。あの時の雪谷の台詞の意図は、未だによくわかっていないけれど、なにかを感じ取ってしまった気がした。あの言葉に滲んでいたのは、雪谷のテニスにかける真摯さと自信。あんな、むかつくやつだけれど、きっとへらへら笑って俺を見下す時のあいつと、コートで白いボールを追いかけている時のあいつは別人なのだろう。俺がかいま見たのは、後者のあいつだったのかもしれない。根拠はないけど、そう思った。

つまるところ、ソフトテニス部のキャプテンはそういうやつらしい。

嫉妬羨望、わかってる

「っ、」

振ったラケットは、斜めの面でボールに当たった。ベースラインを大きく超えるホームランは、もう今日だけで何本目だろうか。上昇しない気分とやる気に、俺の味方は曇り空の灰色だけのように思えた。グリップを握っていた右手に伝わった違和感が、どうにも言葉に出来ない焦りと苛立ちまでも乗せて、頭の中のずっと答えの出ない場所に流れ込んで来る。混沌とした泥沼を更にかき混ぜたところで、悪化も好転もするわけがなくて、ただどうにもそこにいると泣きたくなる場所で足踏みをしている以外になかった。溜息をついてコートから出たら、坂野に声をかけられる。ハル。振り向いたら、頭にぽんと手を乗せられた。

「調子悪ぃな」

「……ごめん」

「練習進めといてやるから、顔でも洗ってこいよ。落ち着いたら戻ってくればいいから」

そんな心配しなくても平気だ。そう言うべきだったのだろうけど、言い返す気力はどこにもなかった。だから無言でひとつ頷いて、ドアに向かって歩いた。駄目だ。今の自分がおかしいのはわかってる。

コートを離れて、フェンスのドアを開けて外に出た。どんよりと濁った空は、味方であるように思えてやっぱり陰鬱な気分に拍車を掛けてくる。世の中の不安や苦しみを飽和するまで吸い込んだから、この空は俺のこの世界から見たら些細な悩みになんて目をかけてくれないのだろうか。苦しみは主観でしかない、とは坂野が人を慰めるのによく使う言葉だったけれど、そう考えると余計に俺は何もかもに見放された気分になる。

何をしに行くつもりだろう、というコートの中からの目がいくつかあったけれど、全部無視した。曲がりなりにも俺はこの部のキャ

プテンだというのに、こんな行動は最低だ、ってことはわかっている。硬式テニス部は男女合わせて五十二人、この学校の中でも人数はかなり多い方だ。その一番上に立っているのが自分だというはっきりとした自覚は、先輩が引退して三ヶ月経った今でもなかなか沸いてこない。キャプテンがこんなに頼りないままでは、部員がしっかり付いてくるわけもないだなんてことは、俺にだってわかってる。わかって、いるけど。

出来るだけコートから離れたくて、目的の場所があるわけでもないけれどひたすら歩いた。アスファルトには足跡が残らないから、下だけ見ていたらどれだけ歩いたのかがすぐに迷子になってしまう。ぼんやりと何かを考えているような、それでいて考えていることに具体的な形はないのだから結局考えていないのと同じような、そんな抽象的な何かで頭をいっぱいにしながらただひたすら足を動かしていた。ふいと意識が現実に戻ってきて、俯けていた顔を上げたら、そこはもうコートから随分離れた体育館の真横だった。

ふらふらと近くにあった水道に向かって、蛇口を上に向けてから勢いよく捻った。水は上を向いて次々とあふれ出して、ポンプの力を借りながら下から上に、重力に逆らって積み重なっていく。それがまた地球に引っ張られて落ちてくるその下に、短く息を吸い込んでから思い切り頭を突っ込んだ。今はもう秋も終わりかけに近い時期で、汗もろくにかいていないし体温だって上がっていない。だから冷たさはそのまま冷たさだった。元から高くない体温を、触れたところから次々に奪っていくのを機械的に感じてはいたのだけれど、それでも暫くそのままでいた。いろいろ考えていたら、冷たさはどうでもよくなった。

都大会、結果はいつもと同じだった。いや、同じではすまされない。いつもよりも酷かった、が正解だ。決してずば抜けて強い相手ではなかったのに、カウントは２－６なんていう惨敗の数字だった。取ったのは最初の二ゲームだけ、あとはあっという間に流れを持っていかれて、それを取り返しあぐねているうちに六ゲーム連続で取

られてしまった。負けたこともそうだけれど、そのゲーム展開がほんとうに最悪だ。良いとか悪いとか、そんな次元にすら達していない自分の実力を、ひしひしと実感してしまった。

結局、関東なんて手が届くはずもなかった。都大会二回戦負け、それでも硬式の中で一番成績がよかったのは俺だった。これじゃだめなのはわかっていて、だからあいつにも馬鹿にされるわけで、そんなことはわかってる、全部わかってる。今の硬式が弱いのは、キャプテンの俺が弱いからだ。そんなこと言われるまでもなく、自分が誰よりも一番わかっているんだ。その事実は、目を逸らすことすら出来ないほどはっきりと俺の目の前にあった。ずっと前から、今年の夏から直視し続けていたつもりだ。

水から頭を引き抜いて、蛇口を閉め直す。上を向いたら髪と首を伝って水滴が次々にユニフォームに吸い込まれた。それは首から降りて背中にも流れ出し、伝う冷たさに思わず体が震えた。仰いだ視界を覆い尽くしたのは、白と灰色が幾重にも折り重なった雨の降らない曇り空。その分厚い雲が、吸い込んだ呼気と共に胸のもやもやとした部分に溜まっていくような気分がした。どんどんと重さを増して、それは気道を塞いでいく。

雨は降らないのに、見上げた雲にはぽつぽつと極彩色の粒が煌めいて見え、その錯覚を振り払おうと目を瞬かせたら、喉の奥からせり上がってきた苦い物が瞳の端からぼろりと落ちてきそうになった。それに気が付いて慌てて息を呑む。誰がいるわけでもないけれど、泣いてはいけない気分だった。視界がひどく歪んだ。けれど、もとより白と灰色しかない世界の中では、何が変わったとも言い切れなかった。

テニスはずっと昔から好きだった。家が個人経営のスポーツ用品店で、親も両方テニス経験者。だから、ラケットとは物心ついた時からずっと一緒だった。テニスがあるのが当たり前な生活をもう十何年も続けてきたのだけれど、嫌だと思ったことなんてなかった。成績も上手さも関係なく、ただただテニスをするのが大好きだった

のはいつまでだっただろう。中学くらいまでは公式戦の結果も悪くはなかったし、なによりもただ純粋にテニスが好きだった。高校に入ってから、いろいろと変わってしまった。

今でも、決してテニスが嫌いになったわけじゃない。テニスをするのは好きだし、練習だってそれ事態は楽しいし辛くはない。だけど、やっぱり勝ちたいとは思うし勝てないのは面白くないし、そのために努力だってしている。でもそれはもしかしたら、しているつもりなだけなのかもしれない。俺の呼ぶ努力なんてものは、もしかしたら本当はそう呼べるものじゃないのかもしれない。なんて、そんなことを考えているときりがなくなって、結局結果もついてこない。頑張ろうと頭ではそう思うのに、思った通りに体が付いてこない。それが悔しくて情けなくて、改めて考え直したらもうどうしようもなくなってしまった。水道に寄りかかって地面に座り込んだら、立ち上がる気力がなくなった。こんなんじゃ、だめなのに。

「鈴木？」

ふいに声が聞こえた。それが誰のものだか、頭で理解する前に肩が震えた。脳がそれと気が付くより先に、脊髄かもっと違う場所かがそいつのことを思い出して、反射的に俺の体を動かした。それは恐怖とも少し違った感情で、嫌悪感と言ってもどこか違うもので、名前の付けられない灰色の固まりだった。やっと思考が追いついてからも、顔をあげることが出来なかった。なんで、よりによって今お前が来るんだ。いつだって嫌だけど、今は、特に会いたくない。何よりも誰よりも、聞きたくない声だ。

「なにしてんの、お前」

硬式今部活中だろ。そう言ったヤツの顔は、まだ見ない。ああそういえば、今日軟式はオフの日だ。降ってくる訝しげな声には返事も反応もしなかった。もう一度名前を呼ばれる。きっと不審に思われているだろう。濡れた髪もユニフォームも、こいつ相手にまったく言い返さない俺も。

「さしずめ、また関東出れなくて拗ねてんだろ。なあ、鈴木晴也」

覚悟していた言葉ではあった。言い方も声の響きも、こいつならこうだろうという予想は付いていた。だけど、思いの外それはまっすぐ心臓に突き刺さってきた。刺されたことに気が付いたのちも、じんわりと柔らかい部分をかき回して抉ってくる。抱えた膝に頭を埋めた。嫌だ、今は嫌だ。それ以上、聞きたくない。降りもしない雨よりも、もっと冷たい言葉だ。

「お前キャプテンだろ？　んなとこで逃げ出してていいのかよ。キャプテンがそんな弱っちいから硬式はいつまでたってもその程度なんだろ。お前だってわかってんだろーが、違ぇの？」

水色は、ひどく鋭利な色だと思った。白と灰色の中ではそう目立ちもしないのに、いつの間にか潜り込んでずっと隠していた場所を見つけ出している。雪谷の言葉は全て正論だ。そんなことはわかってるし、反論なんか出来やしない。いつもだったら腹が立つだけの言葉に、どんな屁理屈ででも言い返していた言葉に、がんじがらめにされて動けなかった。それは赤の他人から突きつけられた、紛う事なき現実だった。客観的に見てそうあることは明らかで、全部悪いのは俺だ。俺自身の問題だ。そんなの、わかってる。わかっているんだ。

「んな弱小部なくせに、よくうちに喧嘩売れんな。尊敬すんぜ」

「っ、わかってるっつの！」

言葉は勝手に喉の奥を震わせて、開いた唇から飛び出した。その勢いに乗せて顔を上げたら、目の前に見えた雪谷は制服姿だった。少し目を見開いた珍しい表情をしていたのは、俺がいきなり上げた声に驚いてなのだろうか。

「俺たちが弱いことだって、俺が弱ぇことだって、そんなのわかってる。もういいだろ、放っといてくれよ！　俺だって努力してねぇわけじゃねぇし、そりゃお前から比べれば足んねぇのかもしんないけど！」

負けの決まる一本を抜き取ったジェンガが崩れ去るように、言葉は堰を切ってぼろぼろとこぼれ落ちた。雪谷はその表情のまま固ま

っていた。溜め込んでいた鬱屈した思いが、詰め込まれたどんよりとした感情が、ぶつける相手をみつけて一気に吹き出した。言い始めたら、止まらない。

「お前はいいよな、好きなことに才能あって！　お前みてーな奴ばっかじゃねぇんだよ、俺が弱いことだって、最低なキャプテンなことだって、んなことわかってる、」

せり上がる言葉とともに、視界ではついに何もかもが混ざり合ってしまった。堪えていたものがあっという間に溢れかえって、耐えようとする意思も追いつかずに流れて頬を伝った。まだ被った水が乾かないその上に、新しい雫が流れた。水道水とは違う軌跡を辿って、それは顎までさらりと流れ落ちる。きっと雪谷にも気付かれた。だめだ、ほんとうに。これくらいで、こんな。

「わかってっから、……もう、いいだろ」

俺は、つくづく弱い。

「俺が恵まれてる、ってわけか」

ぽつりと雪谷が呟いた。その言葉の意図を聞き返す前に、踵を返す音が聞こえた。スニーカーでアスファルトを叩きながら、黒い石と石の間、それから俺と雪谷の間の空気に足音は吸い込まれていく。その後ろ姿に何かを言う事なんて出来なかった。俺はまたひとりになった。

最低だ、涙が止まらない。このくらいのことで、部活ほっぽり出してひとりこんなところで泣いていて、こんなだからだめなんだってわかってる、わかってるけれどどうしようもないし、どうすることもできない。それが、一番最低なのだって、わかってる。俺はキャプテンだ。みんなの上になっていなくちゃいけなくて、みんなを支える立場で、みんなの見本になる立場だ。なのに、今の俺はそんな理想像にはほど遠い、テニスプレイヤーとしてすら満足だなんてこれっぽっちも言えない状態にある。それだって理解はしているのだけど、それ以上にどうしても辿り着かない。

俺は、キャプテンに向いてないんじゃないか、この部の一番上に

立つのは俺じゃない方がいいんじゃないか。責任を取る覚悟はあったけれど、覚悟だけではどうしようもない。俺には、そもそもの資質が足りないんじゃないか。ここは、俺がいていい場所ではないんじゃないか。頭を覆い尽くすその考えが無限ループして、どうにも動くことすら出来なくなって、ただひたすら膝を抱え込んでしゃくり上げていた。それしか出来ない自分が、本当に情けないと思った。

「おい、ハル」

声に呼ばれて目を開いたら、前には見慣れた姿があった。暗いから顔はよくわからなかった。そう思ってふと気付いた。見上げた空が、白かった記憶はあるのだけど、暗いだなんてそんなことを思った覚えはない。だけど、何度瞬きを繰り返しても視界は黒と紺のベールを被っていた。ぼやけていたピントは暗さに徐々に適応して、ようやく最大限にまでくっきりと姿が見えるようになる。

「お前こんなとこで寝てたのか、風邪引くぞ」

「俺、寝てた？」

「おう、がっつり」

水道に寄りかかって泣いているうちに、俺はいつの間にか眠り込んでいたらしい。声が掠れているのと、頭の奥に鉛を詰められたような重さと鈍い痛みが走っているのとも寝起きだからなのだろうか。俺を迎えに来たらしい坂野は、座っている俺と目線を合わせるために屈み込んでから俺の頭に手を置いた。

「なんで髪濡れてんだ」

「顔洗えって言われたから」

「……お前なあ」

コートを離れる前に坂野にいわれたことを思い出して、水を被ったことの言い訳に使ってやった。案の定坂野は溜息を付く。ほんとに、風邪引いても知らねぇぞ。その言葉に、ごめんと一言謝った。全部俺を心配してくれていたからだってことは言われなくたって理解できている。

「部活、戻んなくて悪かった」
「いーよ、んな時もあるって」
「……ごめん、俺、最低だよな。キャプテンとして」
思い出したのは、考えていたこととあいつの言葉。こいつはそんな俺をいつだって気にかけてくれているというのに、俺が考えているのはいつだって俺のことばかりだ。
「ハル、お前さ。雪谷に、何か言われた？」
「……え？」
坂野の言葉が、あまりに唐突すぎて声が詰まった。俺はあいつの話題なんか出しただろうか。多分、というかきっと出していない。なら、どうして坂野はこんなことを言いだしたんだ。なんで。絞り出した声が震えたから、図星だということはバレただろう。
「部活終わる頃にさ、雪谷に会ったんだけど。そん時、俺何も言わなかったのに、いきなりお前がここに居る、ってこと言ってきて」
「あいつ、が？」
「おう。で、来てみたらお前はこんなだし、あいつ多分お前になんか言ったな、って思って」
ハル、泣いただろ。日のほとんど落ちかけた中で、表情すらはっきりとは見えないのに涙の跡になんて気が付くはずがない。それでも、坂野は疑問系ではなくきっぱりとそう言い切った。それは見事に正解だった。
「さすがに、罪悪感感じたんじゃねぇかな、ってさ。泣かすまで言うつもりもなかったんじゃねぇか、あいつ」
「あいつが、んなこと思うわけ」
だってあいつは、雪谷は本当に俺が嫌いなんだから、そんな今更。
「あいつの真意なんか知らねぇけど」と言って坂野は笑う。確かにそうだ、俺にもわからない。予想も付かないし、考えようとすら思わない。きっと、思ったところでわかりもしない。あいつのことなんて、何一つ。
「ハル」

「ごめん、坂野。……ごめん、頼りねぇキャプテンで」
呼ばれた名前を遮って、言葉を発した。ただただ吐き出したかった。弱音を吐き続けたままじゃいけないのはわかっているけれど、こいつになら言ってもいいと思えたし、誰かに、確実に俺の味方だと信じ切れる奴に聞いてほしかった。そう思ってしまう自分がやっぱり弱いことも知っているのだけれど、坂野はいつだってそれを許してくれるから。だから、俺はこいつに、坂野に甘えてしまう。副キャプテンは黙ったままだった。肯定も否定もせずに、ただ無言で俺の次の言葉を待っていた。
「俺は、弱くて頼りなくて情けなくて、こんなのがキャプテンで、駄目だってのはわかってる。だけど、どうしようもなくて、みんなにはすげぇ申し訳ねぇって、思うんだけど」
言葉はまったく要領を得てはいなくて、ただただ溜め込んだ感情を表に出したいだけだった。こいつなら、受け止めてくれるのを知ってるから。ハル、晴也。坂野が俺を呼ぶ。頭に手が乗せられた。子供扱いが、どうしてか今は心地いい。
「お前は、強ぇよ」
「なに、言って」
「強ぇだろ、俺等の中では一番」
そんなこと。否定の言葉は、最後が掠れて消えかけた。
「お前は、雪谷みてぇになる必要はないと思う。お前は、お前のままでいいよ、ハル」
坂野が立ち上がって、そのとき気が付いたのは坂野が持っていたラケットバッグが二つあることだった。片方、青い坂野のバッグの方から坂野はタオルを取り出して、俺に渡してきたから受け取った。使い古されてごわごわとしたそれに顔を埋める。坂野の言葉が、ひどく痛む場所からゆっくりと染みこんきた。それに押し出されるようにして、タオルに吸い込まれていったものもある。秋風の冷たさが髪を揺らした。
「俺は、お前はいいキャプテンだと思ってるよ。心配しなくても、

付いてってやるから」
　その言葉に、不覚にもまたじわりと来た。タオルを顔に押し付ける手に力が入る。いつだって、俺の一番欲しいと思っている言葉をくれるのがこいつだ。それが本心であることを、まったく疑わせない声色だった。信じられないと理性で思っても、どこか頭と思考の根本が坂野の言葉に全幅の信頼を寄せているのだ。
「坂野」
「なんだ？」
　雪谷に見つかって怒られて馬鹿にされて、あの時俺は本当に雪谷が羨ましいと思った。それを認めるのは癪だけど、本当に心からそう思ってしまったのだから仕方ない。あいつのずば抜けた才能が、好きなもので上にいける実力が、途方もなく羨ましくて、俺にそれがないのが悔しかった。あいつのことは嫌いだ、だけれどその反面、あいつのことが誰よりも羨ましくて、妬ましくて。そんなの、俺のわがままだ。あいつだって努力しているからこそだなんて、そんな当たり前のことくらいわかる。だけど、土俵が違うと思うにはあまりに近すぎた。ボールもラケットも違うけれど、テニスであることにかわりはない。だからこそ、あいつを見ているとどうしようもなく悔しくなってしまう。あいつのようにありたかったと、思ってしまう。
　でもそんなどうしようもない俺でも、大丈夫だと言ってくれる奴がいることに、こいつが俺を支えてくれていることに、俺がどれだけ救われたか。きっと坂野は知らない。坂野は義務感で人を助けるような奴ではなくて、こうやって声をかけてくれるのも助けてくれるのも、こいつにとっては当たり前で自然なこと。
「明日、朝練付き合って」
　ありがとうの代わりの一言。坂野が、一瞬固まってから笑う音が聞こえた。夕方から夜に変わる空気を揺らして、坂野は肩を竦めた。
「お前らしいよ」と、立ち上がろうとした俺に右手を差し出した。坂野が関心のない奴には声をかけない人間だということを知ってい

るから、俺はいつだって坂野の手に素直に縋る気になれる。
「いーぜハル、その意気だ」
「……おう」
俺が、頑張るしかねぇ。思い出したのは、そんな単純なことだった。

意外なあいつの顔と過去

「ごめん坂野、もう学校着いてる？」

携帯片手に、階段に向かって駅のホームを早歩き。学校まではあと一キロなのだけど、約束の時間までは後一分だ。こんなことになってしまったのも、朝早くから遅延した電車のおかげだ。坂野に謝罪の電話を入れて、事情を説明しながらとにかく歩く。十分もしないうちには着くだろうから、朝練が出来なくなるわけではないけれど、間違いなく遅刻は確定だ。

お前は遅延してなくたって遅刻すんだろ。電話の向こうの言葉に、反論が出来なかった。何も言わずにいたら、機械越しのくぐもった笑い声が聞こえた。後何分？　その問いに五分と答えて、電話を握っていた右手を下げる。一キロ、走れば余裕だ。

電話を切ったと同時に地面を蹴った。背中のラケットバッグが上下に揺れて、前に進もうとするのを引き戻してくる。スピードに乗ったまま改札に定期入れをかざして、いつものようにそのまま通り過ぎようとしたら、普段とは違う音が聞こえて足下の小さい扉が勢いよく閉まった。行く手をそれに邪魔されて、振り返ってみたら普段は青いところが赤く光っていた。こういう時に限って、改札はちゃんと仕事をしない。溜息一つ、戻ってかざし直したら何事もなかったかのようにドアは開いた。テンションが下がる。

走るのが面倒になって、駅を抜けるまではのろのろと足を運んだ。昨日が嘘みたいに真っ青で、秋晴れの単語を調べたら参考写真として出てきそうなくらいに高く澄んだ空だ。イチョウはまだ黄色くなりきっていないけれど、隣のブナの木は見事なまでの赤色を青の上に重ねていた。急がねぇと、と自分に喝を入れて、もう一度地面を蹴り飛ばした。ゆさゆさ、ラケットバッグの中身が揺れる。おかげで、息が上がるのもあっという間だ。

それが目に入ったのは、ほんの百メートルくらい走ったところでだった。上がった息を整えながらスピードを緩めて、予想を確信に変える。目の前に見えた二つの人影、その片方は後ろからでもわかるほど見慣れてしまっていた。なんだ、朝からあの野郎を見るなんて最悪だ。溜息をついてからやってきたのは、どうにも不思議な気分だった。二人。ほんの少しの違和感を持ってきたのは、その事実。あいつが部活以外で誰かと一緒にいるところなんて初めて見た。というよりは、俺が部活以外でのあいつを知らないだけなのだろう。地面をならす足音二人分は、俺のものとは距離以上に遠いところから聞こえた。

一度気になってしまえば、足は止まる一方だ。向こうはいっと気付いてなんていないだろう。雪谷は自分より背の低いそのもう片方に視線を合わせていて、その横顔からちらりと伺えた表情に呆気に取られてしまった。見たこともないほど、純粋に普通にまっすぐに、雪谷は笑っていた。見た事なんてない、想像すらしたことのない、できなかった顔だった。パンダが人を襲うところを見たら、きっと同じ感想が得られるだろう。それはあまりに似つかわしくない、でも考えてみれば当たり前のことだ。ごわついたタオルで心臓を拭われたような感覚が、体の真ん中を陣取った。

隣の奴は、何度か見たことはある同じ学年の奴だ。顔を覚えている、というよりは、印象が強かった。入学した時から、今までずっと松葉杖。どうしてだかはよく知らないし、その類の噂も聞いたことがない。話したこともないし名前も知らないけれど、その特徴で見覚えだけはあった。そこまで背の高くない（小さいわけでもないけれど）雪谷と比べても小柄で、笑った顔はやたらと幼く見える奴だ。こいつが、雪谷と知り合いだったなんて知らなかった。そう思ってから、気が付いた。軟式のキャプテンとして以外のこいつなんて、俺が知っているわけがない。

松葉杖で歩く相手の歩幅に合わせて、だけどそれを意識している素振りなんか見せずに、雪谷はそいつの横で、道の端をゆっくりと

歩いていた。このスピードじゃ学校までどれだけかかるかわからない、だからこんな朝早くから登校しているのだろう。けれど、二人ともそれを苦にしている様子もなかった。仲が良い事なんて、この姿さえ見ればわかる。そうでなかったら、一緒に登校しようだなんてきっと思わない。話している内容は聞こえないけれど、楽しそうなことは後ろからでもはっきりわかった。

気付かれる前に、もう一度走り出した。俺は急いでいるから、こいつらのことになんか気付いていない。そう自分に言い聞かせて地面を蹴って、二人の横を通り過ぎる。追い抜いた瞬間、雪谷の視線がふとこっちに向いたような気がした。隠し事がばれたときの、（別に隠れていたわけではないけど）心臓が跳ねる感覚は無視して秋の風を体で切る。視線については、気のせいだと思うことにした。

ただなんとなく、あの雪谷の表情が頭にこびり付いて離れなかった。笑顔といえば嫌味か馬鹿にした顔、俺が知っているのはそれだけだった。あんな表情が出来る奴だったなんてこと、なによりもむかつくあいつのこと、俺は何も知らない。知っていることなんて、ほんとうはなにひとつなかった。

「あ、坂野君」

あの時のもう片方の名前を知ったのは、それから意外とすぐのことだった。

コートの片付けをして坂野と部室に向かおうとしていたとき、俺たちはそいつにばったりと出くわした。俺等の前で立ち止まって、そいつが発したのは坂野の名前だった。知り合いなのか。目で聞いてみれば、坂野は頷いた。

「初瀬じゃん、久しぶり。雪谷と一緒じゃねぇの？」

「ガヤは顧問の先生に呼ばれて職員室。長くなりそうだから、先帰ってろって」

初瀬。坂野は目の前のそいつのことをそう呼んだ。いつ知り合ったのか、どんな関係なのかまったく知らない。だから俺は話に入れ

なくて、きっとこれから入る話もないだろうから先に行っていようと歩き出した、歩き出そうとした。
「ねえ、君が鈴木君？」
「え？　そう、だけど」
そうしたら、唐突に声をかけられた。人当たりのいい笑みを浮かべて、初瀬とやらは首を傾げる。俺は、こいつの名前なんてつい今がした知ったところだというのに、こいつが俺の名前を知っていたことに驚いた。
「硬式のキャプテンの鈴木君だよね？　ガヤと仲悪いので有名な」
「ガヤ、」
「雪谷のこと」
有名なのか。そう聞こうとして、止めた。雪谷と仲がいいのなら、きっと俺の話はあいつから聞いているのだろう。そして、雪谷から話を聞いてるなら俺の印象なんてきっと最低以外のなんでもない。だから、何を言えばいいかわからなかった。初瀬は黙り込んだ俺を見ると、「あいつ、随分わがままだろ」とそう言ってまた首を傾げて笑った。その言葉も意外で、返事が出来ない。
「ガヤ戻ってきそうにないし、俺は先帰るよ。じゃあね、部活頑張って」
「おう、お前も早くよくなるといーな」
「うん、ありがと」
坂野が初瀬にかけた言葉の意味も理由もわからないまま、初瀬は松葉杖をついて校門の方へ歩いていった。ゆっくりした速さで、背中が遠ざかっていくのからなんとなく目が離せなかった。柔和なこいつの笑顔と、雪谷のあの腹の立つ笑顔がどうにも重ならなかった。
「あの初瀬って奴、お前の知り合いだったの？」
部室に戻ってから坂野に聞いたら、返ってきたのは生返事だった。
「あー、」と宙を仰いで、手を首の後ろに置いて言葉を探す動作は、坂野の癖だ。

「知り合いっつーか、同じ高校になったのびっくりして、一年の時に話しかけてみたっつーか」
「どういうこと？」
意味がわからなくて問い直した。ほとんど伝わっていないのは坂野も承知していたようで、もう一度意味を持たない声を上げた。俯いて何秒かそのまま硬直し、それから顔を上げてこっちを見る。その表情はいつになく真剣だった。
「ハル、お前中学の時の雪谷のこと、ほんとに何も知らねぇんだっけ」
「なんだよ、突然。俺ずっと硬式だし、知らねぇって」
そっか。坂野は何か考え込むように、今度は学ランの襟を指で弄る。それから、暫く黙り込んだ。ようやく次に口を開いたのは、物で散らかった部室の床に腰を下ろしてからだった。
「じゃあ、初雪の話知らねぇんだな」
「……初雪？」
なんだ、それ。文脈にそぐわない単語を反芻する。坂野はひとつ息を吐いて、自分の座っている目の前の床を指さした。「長くなるから、聞きたきゃ座れ」。そう言われて、座らない理由もなかった。目の前に投げ置かれている、誰かのウィンドブレーカーを足で寄せて冷たい床に座り込む。
「雪谷といがみ合ってるお前にこの話するのもなんなんだけどさ、まあ」
「どういう意味だよ」
坂野はまたすぐには答えなかった。「雪谷はお前には知られたくねぇと、思うし」なんて曖昧な言葉を並べる。思わせぶりなのが気になって、もう一度急かしたらようやく口を開く。
「あいつ、初瀬さ。中学時代の、雪谷の元ペアなんだよ」
俺が話したことは黙っとけよ。そう釘を刺してから、坂野は話し始めた。元ペア。浮かぶ初瀬の姿、顔より先に思い出したのはあの松葉杖。あいつ、が。

「だってあいつ、脚」
「テニスやってて、こっぴどく痛めたみてぇ」
脚を痛めた、雪谷の元ペア。初瀬。今まで聞いたこともなかった話だった。だけど軟式がダブルスしかないのなら、中学時代あいつにペアはいたはずで、全国大会に出場したのも当然二人でのはずだ。それは、よく考えれば当たり前のことだ。
「初瀬、晃ってんだけどさ。中学の時、あの二人のペアすげぇ有名で。後衛が初瀬で前衛が雪谷で、最初の文字両方取って『初雪』。二年で全国出た時からそうやって呼ばれ始めて、三年では間違いなく優勝候補だって言われてた」
初瀬と雪谷で、初雪。できすぎるほど良くできた愛称だ、というのが第一印象だった。「都大会で一度当たったけど、ものすげぇ強かった」と、坂野は思い出すように呟いた。
「コンビネーションが、ほんとに凄かった。互いに何考えてっか全部わかってるみてぇで、あいつら幼なじみらしいし、とにかく全部流れ持ってかれて。俺後衛だったし、地区近かったのもあってあいつらの試合良く見てたし、初瀬には憧れてた。初雪はやたら仲良いとこも有名だったんだよ、テニス以外でも」
雪谷に、あんなむかつくやつにも仲のいい奴がいるだなんて意外にも程があったけれど、ふいにこの前見た雪谷のあの笑顔がちらついた。初瀬といる時のあいつの顔は、俺が知っているのとは全然違うものだった。仲の良い相手だと、あいつはああいう風に笑うのだろうか。それとも、初瀬だからだったのだろうか。俺にはわからない。
「いろんな大会で優勝かっさらって、全国までも順調に勝ち進んでって、やっぱ初雪が一番強いんじゃねぇかって話にいろんなとこでなってた、んだけど」
そこまで話して、坂野は口ごもる。こっから先を言ってもいいのかを悩む表情が伺えてから、あえて「なんだよ」と急かした。ここまで話しておいて止められたって困るし、そんなの今更だ。ただ単

純に知りたいと思ってしまったた。なにかある、きっと、雪谷が知られたくないことが、重い何かが。それは坂野の語り口調から、予想は出来たことだった。

坂野はゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。物語を語るように、その時の話をただ単調に、記録を読むかのように機械的に、無感情に話してみせた。心臓が掴まれる感覚は、話が進むごとに握力をどんどんと加えられていくように肥大していった。覚えたのは言いようのない、表しようのない感情だった。あんなむかつく奴の、予想も出来なかったしようがなかった、話。完全な予想外が、それどころか考えもしなかったことがそこにはあった。

全部聞いた後、俺はやっぱり何も言えなかった。「そうか」とそれだけ言って、座ったまま動けなかった。あまりに現実味のない話だった。漫画かドラマか、だけどそれは実際あいつに起こったこと。同情なんかしてやりたくない。だけど、どうしようもなく、苦しくなった。その思いに付ける名前を俺は知らなかったし、きっとそんなものはないのだと思った。

部室を出てすぐ、「塾だから先行く」と坂野は鍵を持って小走りで駆け出していった。階段を降りて、暗い地面を眺めながらひとりで校門まで歩く。さっき聞いた話が頭から離れなかった。黒いスクリーンに聞いた話の映像が投影されるようで、どうしても見ていられなくなってしまったのだけど、日の落ちた屋外はどこを見ても暗幕の裏のようだった。どうしていいのかわからない。どうして俺が、あいつの話でこんな思いをしなくちゃいけないのかがわからない。そんなことを考えていた矢先だった。

「おい、鈴木晴也」

かけられた声の色と響きに、鳥肌が立った。はっと前を向いたらあったのは校門で、声が聞こえたのは後ろからだ。聞き間違えるはずもない声だった。振り返ったら暗い中に見えたのは案の定、今一番会いたくない姿だった。「なんの用？」の一言すら、目を見て発

せなかった。
「何の用、じゃねぇよ。ずっと言おうと思ってたんだけど、いい加減コートの硬式のボール片付けてくんねぇ？　すげぇ邪魔なんだけど」
「なんだよいきなり。別に混ざるわけでもねぇし、いいじゃん」
「なにがいいんだよ、コートにボール転がってたら邪魔だって気付かねぇ？」
　てめぇらはいっつもそうじゃねぇか。不機嫌な雪谷の声はいつものものなのに。あの話と、どうしてもうまく重ならない。こいつはいつもこうで、上から目線でむかつく奴だ。だというのに。
「うっせぇな、お前等のとこと違って人数多いから手ぇ回んねぇんだよ」
「は？　なんだよその言い訳。お前、自分が無能ですって宣言してるって気付いてっか？」
　ボールくらい拾わせられねぇの？　キャプテンの癖に。そんなんだから、硬式は。いつもと同じに続く言葉、聞き慣れた筈の硬式を馬鹿にする言葉。いつものことなのに、いつも以上に苛々した。言葉の内容に、というよりはこいつの声で言葉が流れてくることそのものに。苛々、違う、なんといえばいいのだろう、この、ごちゃごちゃして何か、吹き出しそうで吐き出したい気分。なんだ、これは。わからないけれど、ぐちゃぐちゃで形もわからなくて、ただ、溜まってて飽和してあふれ出しそうな、ぶちまけてしまいたいどろどろの感情。
「こんな無能が、トップだなんて硬式の奴等も可哀想なこった」
「っ、うっせぇっつってんだろ！　お前にだけは言われたくねぇ、てめぇだって随分最低なことしてるくせに！」
　言葉が飛び出たのは、無意識だった。吐き出したかったものが、ぼろりと零れだした。一度出してしまったら止められない、口から出した言葉はもう二度と戻らない。外れてしまった堰は、閉じることを知らない。

「初瀬って奴、お前の元ペアさ、お前が怪我させたんだって？　テニス出来なくさせたんだろ、中学の時。そんな奴が、キャプテンやってるとか笑わせんなよ。お前に、んな資格あんのか」
　言ってしまった。坂野からついさっき聞いた話、雪谷の中学時代のこと。勢いに任せて投げつけた言葉を受け取って、雪谷の表情が固まった。沈黙の中ではお互いに何も言わない言えない。その長さと比例して、勢いの余韻は冷めていった。雪谷はまだ何も言おうとしていなくて、冷静になっていくと同時に背筋が震えた。俺、は。何を、言ってしまった。雪谷は、俺の言葉を受け取った？　受け取っただなんて、それはもしかしたらひどい誤解で、俺は。――一番、なによりも言っちゃいけないことを、あいつにぶつけてしまったのかもしれない。
「雪、谷」
「……なあ、鈴木」
　謝ろうと思った。それはいつもなら絶対にあり得ない思考だったのだけど、今ばかりは当然のようにそう思った。俺が今踏みにじったのは、きっとこいつが一番触れられたくなかったところで、触れちゃいけなかったところだ。例えどれだけこいつの事が嫌いで腹が立ってむかついていたとしても、それでも、触ってはいけなかったところだ。きっと、人として、ひとりの人間を相手にする上で、絶対に触ってはいけなかった場所だったのだろう。
　口を開く前に、雪谷が俺を呼んだ。それはいつもからは想像も出来ないほど低くて、水色とはほど遠い呟くような声だった。雪谷は俯いていた。ラケットバッグの持ち手を握った指が、震えているのが見えてしまった。こいつのこんな姿を、初めて見た。震えは怒りのせいだろうかそれとも、いずれにしても雪谷が口を開くのが怖かった。だけど、言ってしまったからには仕方ない。なんてそんなふうに、雪谷の反応を怖がっている自分がいるのことに驚いた。どう思われたっていいはずなのに、だって俺はこいつが嫌いなんだから。だけど、でも。それでも。雪谷が抱えていたのは、暗い夜と同じ色

だった。
「晃は元ペアじゃねぇよ。元、なんかじゃ」
雪谷の言葉は、それだけだった。あまりに、静かだった。空気を最小限にしか揺らさないその音は、放射能のように何も揺らさないままっすぐ俺の中心に染みこんできた。それだけ言って、雪谷は俺の横をすり抜けて校門を出て行った。その後ろ姿を、追いかけることなんか出来なかった。どうしようもなかった。俺は、最低だ。
あいつが嫌いだ、俺は雪谷が大嫌いだ。きっと今のところ世界で一番嫌いな奴で、顔なんか見たくなくて会話もしたくなくて、関わりたくだってないのだから、あいつが傷つくとかなんだとかそんなのはどうでもよくて、調子に乗ってるあいつに腹が立って、だけど、だけどそれでも。俺がやったのは、きっと人間として最低なことだ。雪谷が嫌いだとか、気にくわないだとかそんな話じゃなくて。だって、あの反応は、あいつは、本当に。聞かなければよかった、なんて思ってしまった。聞こうとしたのは俺なのに、渦巻いていたのはそんな身勝手な後悔だった。いつのまにか上がっていた心拍数が、そのリズムで頭の中をかき混ぜる。ブラックホールのようにいろいろな感情を吸い込んだその渦は、重力を増してどこかわからない場所に居座っていた。わからなかったけれど、いることだけは確かにわかった。
校門を抜けた雪谷の姿が、曲がり角を曲がって見えなくなるまで。目を離すことも出来なくて、俺はここから動けなかった。なにもかもが、あまりに重すぎた。

初雪の降る夏（前編）

あいつの、鈴木の言葉が頭から離れなかった。家までの道のりを歩きながらずっと、それが鐘を鳴らすように内側から反響していた。何度も自分で自分に投げつけた言葉と同じものではあったのだけど、人からぶつけられたその重みは桁違いだった。激昂させたのは俺なのはわかっているから、あいつがぶつけてきたのは、勢いと苛立ちと、そんなものに後押しされて加速した言葉だ。それも理解はしている。そして、あいつの言葉が正論であることだってわかっている。

相手のコンプレックスを刺激したのは俺だって同じだ、言葉の非人道さを責める気なんて毛頭無い。それはルール違反なのだから、俺だって言っただけは享受しなければフェアじゃない。そんなことはわかっているのに、やっぱりどうにも辛かった。最も俺にそんなことを思う資格なんてとうにどこにもなくて、それがあまりに自分勝手な感情であることだって知っている。それでも。

街灯に照らし出された影をぼんやりと眺めながら、考えたくもないことに頭が支配された。橙の光は、黒に暖色の暖かみを差すどころか、暗闇の空虚さを引き立てるだけだ。うすらに感じる寒さにも助長されて、頭の中はぐちゃぐちゃだというのにどこかぽっかりとしていた。なくしたというよりは戻ってこない。そんな、空気の抜けたような虚無感があった。自分の影をひとつずつ踏みつけて、無意識に辿っていた家路の先には、あっという間に見慣れた我が家が見える。角を曲がった記憶も、坂を上った記憶もないままに、久しぶりに現実に戻ってきてラケットバッグから鍵を取り出した。

玄関の扉を開けて、リビングには顔を出さずに二階への階段を上った。部活用具と教科書が詰まったラケットバッグは、いつも以上に肩から体を後ろに引っ張った。どうにも顕著に感じてしまった重さに、階段横の手すりを掴んだ瞬間、ふらりと体が揺らいで階段の真ん中辺りでうずくまる。最悪だ、なんであれだけのことで。聞こ

えた「おかえりなさい」が、誰の声だかも覚えていない。
重い体を引き摺って部屋に辿り着いて、ラケットバッグを床に投げ捨てた勢いでベッドに身を埋めた。頭の中で混ざり合ういろんな場面と、いろんな声と言葉と。なにも考えたくない、考えたら抜け出せなくなるのは自分が一番よく知っている。いつだってそうだ、果てのない思考は堂々巡りを繰り返して元の場所に戻ってきて、それに気が付かないままに先へ先へを目指して円を描く。その無意味なことだってわかっていた。それでも、フラッシュバックする記憶が留まらなかった。出口のない湖に、水が流れ込む。
言葉に出来ない靄に満たされた頭の中を駆けめぐったのは、何度も、何度も何度も思い出した、夢でまで見た、どうしたって俺の中から離れていかない映像。なにより思い出したくない、それでいて捨てられない。捨てるわけに、いかないあの時のこと。

「ガヤ、お前は前出てて。サイド開けとけば、向こうの後衛はそのうちそっち打ってくるから。止めれる？」
中学三年の夏、全国大会準決勝。ファイナルゲームでデュースアゲイン。見事な接戦だった。
俺と晃は、中学の頃相当に有名だった。晃と最初に組んだのは小二でテニスを始めた時で、俺も晃もそれ以来互い以外と組んだことなんてなかった。それは密接で長すぎる付き合いで、それほどまでの幼なじみだからこそ、中三になればコンビネーションで俺等にかなうペアなんていなかった。互いが互いを信用しきっていることなんて、いちいち言葉にしなくたってわかる。全国大会優勝候補の声はいろいろなところから聞こえていたし、それを自称できるほどに俺たちは「二人」に自信を持っていた。
決勝進出まであと二ポイント、ボールを渡しにいったら晃に囁かれた。晃のラケットの上に白いボールを乗せながら頷いて、ちらりと向こうのコートを見る。長引いた試合に焦ってきたのか、相手の後衛は序盤より頻繁に俺のサイドを抜こうとしてきていた。そのこ

とを晃に話そうとした一瞬前に、晃が持ち出した話題がこれだった。考えてることがまったく一緒なことにも、今更驚かない。
「スタミナ切れる前に、終わらせるよ」
「了解」
左手の拳を合わせて、斜め前に駆け出した。サンバイザー越しでも、雲ひとつない青空に光る太陽は眩しい。ラケットを構えたら、「デュースアゲイン」のコールが聞こえた。それから少しもしないうちに、ボールがラケットの真ん中に当たる小気味いい音が空気を伝わってきて鼓膜を弾く。その音と同時に息を吸った瞬間、目の前のコートに晃のファーストサービスが突き刺さった。
相手の後衛のロブが俺の頭上を越える。走り込む晃を横目に見ながら、相手の後衛と前衛に視線を戻してポジションを取った。晃が踏み込んだ左膝に目立つ、黒いサポーターにほんの少し目がいった。痛む素振りはみせないけれど、最近あまり調子はよくないようだ。無理をするなといっても、ここまで勝ち上がってきてしまったのだからその方が無理だ。だから何も言わなかった。晃も、息を呑むほどに正確にロブで応酬する。ベースラインぎりぎりに落ちるボールが、決してそのラインを超えないことも俺はわかっていた。
晃のラケットがボールに当たった音が、さっきのものから変わったことに気付いて打球を追えば、俺の目の前に浅いボールが落ちた。打ち損じでもなんでもない、あえて浅く打った球だ。それは、自分の前衛に相手の後衛と一対一の勝負を持ちかけるためのボール。俺はこの球を打った晃の意図をわかっている。晃は、俺がそのことをわかっていることをわかっている。
サイドに出る素振りは見せないまま、視線をクロスに移して、体を傾ける動作で体重もそちらにかけようとするふりをした。ほんの一瞬のフェイントに惑わされて、相手がコースを決めてラケットを振り始めたと同時にサイドに飛びだした。――ビンゴ。
サイドを抜こうと飛んできたシュートボールを、ラケットの真ん中で受け止めた。それは来たスピードのまま相手のコートに落ちる。

相手の前衛が動こうとした瞬間には、ボールはネットの手前でツーバウンドしていた。それを見届けてガッツポーズをしながら、晃の方を振り返った。味方の歓声がコート中に響く。
「ガヤ、ナイスボレー！」
「お前の言った通りだったな」
「いい動きだったよ」
コートの真ん中に寄ってきた晃と、もう何年も繰り返したハイタッチを交わす。触れた晃の左の手のひらは湿っていて、多分それは俺も同じだ。容赦なく照りつける太陽に水分と体力を奪われて、こめかみから汗がしたたり落ちる。それを拭い取った左腕にも汗が流れていた。ウェアの背中が濡れているのさえ感じ取れないほど、背中も汗まみれだ。思わず仰いだ空には、やっぱり一欠片の雲もない。雑念を思い起こす暇すら与えないほどに、そこには青しかなかった。
初雪。観戦席から聞き慣れたコールが聞こえた。それを意識したのは俺と晃と同時で、晃はふっと表情を緩めた。俺も同じ声を聞いているのに気が付いたのだろうか、こっちを向いて晃は笑う。準決勝マッチポイントの緊張感にふさわしくないその笑顔は、昔からずっと晃の強みだ。晃は、プレッシャーでは潰れない。
「降らそうか」
「今更か？」
「何度だって降らせるよ」
かなり矛盾だけどね。晃がそう言って、胸の高さに左腕を伸ばした。手のひらを握って、俺も同じ動作で拳を合わせる。
「夏に降ってる時点で、それも今更だろ」
「あはは、確かに」
勝つよ。口元の角度はそのままで、晃の目がきっと細まった。当然、と言葉を返して二人揃って声を上げた。ラストポイント、これを取れば決勝戦だ。コンディションもテンションも最高に近かったから、負ける気なんてしなかった。いつものポジションを取ってラケットを構える。ファイナルゲームでの「アドバンテージサーバー」

は、俺たちのマッチポイントを示すコールだ。晃が、白いボールを青い空に投げ上げる。

あのポイントを、俺は一生忘れられない。

暫くは上々だった。晃のファーストはまた綺麗にコートに入って、何度か逆クロスのラリーが続いた。出るタイミングを見計らいつつ、一球一球に神経を払う。ロブで頭上を高く越えられて、晃の動きと反対に走る。浅いボールを追いかけて前に出た晃を見て、大股で二、三歩後ろに下がった。晃が前に詰めて打ったボールは、お世辞にも綺麗な打球とは言えなかった。それを前にして相手がラケットを引くのを見て、動きを止めた。あいつはこっちに打ってくる。直感的だったけれど、経験に培われた勘はいつだって確信に近い。ラケットに添えた左手に、汗が伝った。案の定、ボールはまっすぐ俺の足下少し後ろを狙ってきた。ローボレーでコートの中央に返そう、と思った。バックハンドのローボレーは得意だ。足を踏み込んで、右手を体の前に伸ばす。

ラケットは、そのボールにかすりすらしなかった。

疲れていた自覚があったわけじゃない。疲れただの暑いだの、そんなことを考えている暇はなかった。考えていたのは試合の展開だけだったはずなのだけど、実際着実に体力は削られていた。気が付かなかった、忘れていた、自分が自分の思ったとおりに動けることに何の疑いも持たなかった。それがただの言い訳だとはわかってる。スタミナのせいにしろ技術のせいにしろ、あれは俺のミスだ。

ボールに向かって行って腕を伸ばした、そのタイミングが見事に外れていた。どくんと心臓が鳴った。俺は、今何を。大事な局面での一番あり得ないミスに、こんな簡単なローボレーを失敗したことに、一瞬思考が追いつかなくなる。それは絶望にすら近い感情で、世界が一瞬固まったような気分だった。けれども視界の端で晃がこっちに走り込むのが見えて、慌ててコートにしゃがみ込んだ。最悪だ、せっかく流れが来ていたところだったというのに。いくら晃でもこのボールには間に合わない。そのことも直感的に理解した。だ

けれど晃は全力で走った。走って、右手を伸ばして、右足で地面を蹴り飛ばして。そのまま両足が地面から離れて、晃はトップスピードのままボールに向かって飛び込んだ。

「晃、」

両の足が浮いた瞬間、スピードに乗った晃の体がぐらりと揺らぐ。晃は盛大に地面に転げ込んだ。あの瞬間だって、一コマ一コマ正確に覚えている。体が揺らいだ時の晃の表情、乗ったスピードで制御できず横向きに地面に倒れた体、真っ先にコートについた左膝の黒いサポーター、その上に落ちる体とかかる体重。晃の右手から、ラケットが離れた。その横で二回目のバウンドをしたボールのことなんか、見ている場合ではなかったはずなのにそれまでも覚えている。

「っ、……」

何が起こったのか、わからなかった。コマ送りの古い映画を見ているような気分から現実に引き戻されたのは、晃の呻き声が聞こえたからだ。晃は、両腕で左膝を抱えたまま起き上がらない。それが何を意味するのか、気が付くまでにもまた数秒かかった。喉が痙攣する。荒くなっていた呼吸がリズムを忘れて変拍子を刻む。ようやく苦しいを知覚した。

「あき、ら、」

震えた声、考えたくもない事実。立ち上がって、よろよろと近付いた。足腰に力が入らない。コートに横向きに倒れた晃が、息を詰めて言葉が発せないのがどうしてかなんて、考えるまでもない。膝を抱える晃の動作ですべてわかる。

「ごめ、ん」

晃はこっちを見て、途切れ途切れにその言葉を口にした。俺は何も言えなかった。コートはきっとざわついていた筈なのだけれど、俺のいた空間はあまりに静かだった。騒ぎの声が遠い。遠景写真のようにぼんやりとした音を背後に背負って、担架で運ばれていく晃を、俺は追いかけることも出来ずにぼんやりと眺めていた。なにも考えられなかった。なにも、試合のこともなにもかも。目の前で起

こった出来事に、頭がついていかない。なにが起こったかなんてわかっているのに、信じられない。夢を見ているようだ、なんて使い古された陳腐な表現が、随分的を射た比喩だということを、俺はそのとき身を持って思い知った。あれが現実であっただなんて、飲み込めるはずもないことだった。

何度も何度も夢に見たあの瞬間。それが、俺等の夏の終わりだ。

もともと調子の悪かった晃の左膝は、あの時完全に壊れてしまった。治るのにかかる時間は年単位で、暫くは自力で歩くことすら出来ないと医者は晃に宣告した。当然テニスなんてあとどれだけ出来ないか。具体的な数字が言われなかったのは、はっきりとわからなかったから。すぐに治るのか、長くかかるのか、或いは。リハビリを頑張れば、日常生活は問題なく送れるようになります。はっきりと告げられたのはそこまでだった。

晃は推薦のほぼ決まっていた、私立のソフトテニスの強豪校を諦めて、地元の公立高校に進学を決めた。家から、徒歩十分。なによりも近さを重視した選択だ。通学時間以外の条件は何一つ考慮しない。幸い晃は、多少勉強すれば簡単にそこに入れるだけの学力は持っていた。

晃には、あれから何度も何度も頭を下げた。晃からテニスを奪ったのは俺だ。思考が現実に戻ってきて、冷静になってから考える度に、辿り着く結果はいつもそれだ。初瀬晃という天才的な後衛がその才能を遺憾なく発揮する道を、諦める羽目になったのは俺のせいだ。そうでなければ今頃あいつはコートを走り回っていて、良い指導者に教わって、あの頃より上手くなって、どんどん上に行って、だというのにその未来を奪ったのは俺だ。

晃は俺が頭を下げたのと同じ回数それを否定したけれど、その事実は覆しようがない。俺があそこであのローボレーを失敗しなければ、晃が怪我をすることもなかった。それを否定することなんて、誰にも出来ない。俺のせいだ。そのことを考える度に吐きそうにな

るほど苦しいけれど、認めなければならない事実だ。苦しいだなんて傲慢な感情。晃の方が、俺の何倍も辛くて苦しい思いをしているというのに、俺が考えているのはいつだって自分のことだ。苦しむ権利だって、俺にはないはずなのに。

晃には反対されたけれど、俺も晃と同じ高校を受けることを決めた。本当だったら、俺と晃は揃って推薦を貰って同じ強豪校に進む予定だった。そうして、「初雪」のままテニスを続けるつもりだった。だけど晃が駄目になった。だから、俺もやめた。単純明快な論理だ。晃からテニスを奪った俺が、のうのうと一人ボールを打つなんてそんなことできるわけがない。そして、それよりなにより。俺には、「初雪」として以外にテニスを続けていく理由がなかった。晃がいなくなって、初雪としてコートに立てなくなって初めて気が付いた。今までは、考える必要もなかったことだった。

――俺は、お前以外の奴となんかテニスしたくねぇんだよ。なあ、晃。

初雪の降る夏（後編）

寝転がったベッド、思い出して息が詰まった。考える度に苦しくなる、そんな自分が情けなくて、強くありたいと願ってもそうじゃないことを実感してしまって、また呼吸が辛くなる。自己嫌悪の堂々巡り、止まらない。

本当は、ソフトテニス部に入るつもりはなかった。だけど通りかかったコート、あの軟式独特の音を聞いてしまったら。ほんの一瞬思ったことは晃に見透かされて、言われるがままに入部していた。それにだってかなりの罪悪感は感じていたのに、辞めようと思えなかったのは。そんな自分が、やっぱり情けない。晃があんなに苦しんで大変な思いしているのに、俺は。

いろいろと考えて、止まらなくなるのもいつものこと。布団をきつく握って顔を埋める。だめだ、どうして俺は。頭の中で言葉が渦巻いて飽和、ぐるぐるしながらあふれ出そうとする。苦しい。そんな言葉が浮かんで、即座に打ち消した。俺なんか、より。

突然に左ポケットが震えて、その感覚にびくりとした。ジャージ越しに点滅するランプ、取り出した携帯電話の背面液晶に表示された名前。タイミングのよすぎる電話、ばれるのをわかっていて通話ボタンを押した。「もしもし、」。発した一言が掠れていて、間髪入れずに返ってきた言葉。「大丈夫？」。一瞬で、全部見透かされる。

「平気だけど、なんか用か」

「平気じゃないだろ。用なんかないけど、ただかけたくなっただけ」

一蹴される、こんな嘘も強がりも晃には通じない。きっぱりと言い返されて何も言葉が出なかった。かなわないのは昔から。一緒にいる時間が長すぎて、なにひとつ隠せやしない。

「また、なんか変なこと考えてた？」

「変なこと、って」

「昔のこと思い出して自己嫌悪ー、とかさ」
ビンゴだろ。電話の向こうで、晃が小さく笑う声がした。何も返せずにいたら、ひとつ息をつく音。はっきり聞こえたわけでもないけれど、動作まで浮かぶ。
「なに、考えてたの」
一気にやわらかくなるトーン、それに乗せられて話してしまうのもいつものこと。今日だって。気が付いたら、携帯を握りしめて口を開いていた。
「俺、キャプテンやる資格あんのかな、って」
「ばか、あるよ」
「なんだそれ」
「だって、俺ガヤより上手い奴もガヤよりテニス好きな奴も知らないもん。それで十分なんじゃないの」
だけど。続けようとした言葉は飲み込んだ。それこそ、何度も何度も繰り返した応酬。「俺のせいでお前が、」を続ければ、「お前のせいじゃないよ」が返ってくる。だけど、やっぱり俺のせいな事実はここにあるわけで、だけど晃は絶対にそれを肯定しないから。言ったところで同じ。
「俺だけテニスしてて、ほんとにいいのか」
だから、ぽつりと呟いた一言。ほんの少し、言葉の返ってこない空白。それを破った晃の声も、ほんの少し揺らいでいた。
「いいに決まってるだろ。俺は、お前がずっとずーっとそうやって俺のこと待っててくれるのが本当に申し訳ないんだって。何度も言うけど、お前は俺のことなんか忘れてとっとと固定ペア作って、そいつと一緒にインハイ行くべきなんだよ。もっと言うと、俺を追っかけて推薦蹴る必要もなかった、強いとこいっていいコーチに教わって、そしたらお前はもっともっと上行けただろ。お前の才能には、テニスには、それだけの価値があると俺は思うよ」
まくし立てるように、ほとんど息継ぎ無しに晃は言った。「悪ぃ、」思わず口をついた言葉。どうしてこいつは、俺を恨まないでいら

れるのだろうか。ずっとずっと、疑問のままだった。
「だけど、……俺は、テニスするならお前としてぇよ」
晃。呼んだ名前、十年間何度も何度も口にした三文字。テニスといえばいつだってイコールで晃が後ろにいることだった。それが、全部の理由。推薦を蹴ったのも固定ペアを作りたくないのも、全部全部そうだから。俺は、初雪の雪だから。俺のペアは晃だけだ。それが、全部。
「ばか、そんなの俺もだよ。だけど、そんな俺のわがままでお前を待たせとくのなんて俺だって嫌だ。お前はさ、まだ普通にテニス出来るのに、俺のためにその才能を無駄にするなんて、嫌だよ」
「でも、」
「わかってる、わかってるよ。俺だってお前とまたテニスしたい、ガヤが責任感とかじゃなくて、本当に自分のために俺を待っててくれてるんだったら、俺だってそこに追いつきたい。そのための努力だったらいくらでもするよ、してるつもりだよ」
晃の声は上ずっていた。いつもだったら冷静に俺を諭す晃が、ここまで感情的に。その声と言葉を聞いて、なんとなくわかった気がした。用なんかない、だけど晃が電話をかけてきた理由。
「晃、俺は最低だよ」
「なに、」
「お前に怪我させて、テニスだけじゃなくていろんなもの奪って、なのにひとりのうのうとテニスしてて、そのくせまだお前とじゃなきゃ組みたくねぇってわがまま言って軟式の奴等にも迷惑掛けて、そんでこうやってお前に弱音吐いて、お前のことも未だに傷つけまくってて」
並べた言葉、電話の向こうからはなにも返ってこない。自分の声が震わす空気は俺の周りだけで、でもそれは確かに向こうに波及している。気が、した。
「俺には、もうお前と組みたいとか言う資格も、テニスやる資格もねぇよ。そんなのわかってる、お前を待ってるっていうなら俺もラ

ケット置いて同じとこで待ってなきゃなんねぇ、って、わかって」
「駄目だよ。俺は、それだけは許さないからね」
「だけど、それでも俺はお前とまたテニスしてぇんだよ、わがままなのはわかってる、けど。……お前以外に、ペアなんていねぇんだよ」
ごめん。一言投げ出したら、沈黙が広がった。ほんの少し、携帯のノイズが耳をくすぐる。それにまじって、聞こえたのは溜息。息を吐き出す音、晃が口を開くのがわかった。見えなくても。
「もうすぐ、初雪の季節だね」
十一月の終わり、きっとあと一ヶ月もしないうちに。毎年毎年降る雪はきっと今年も。初雪は毎年降る、それは絶対。なのに、俺達の季節は二年前の夏で止まったままだ。だからだろうか、初雪で騒ぐ世間を見ると、どうしようもなく苦しくなる。
「ねえ、ガヤ。俺は、お前のためって頑張ってもいいかな」
「どういう、」
「お前が待っててくれるから、を理由にしてもいい？」
「何言ってんだ、んなの当たり前だろ」
「じゃあ、」
晃の声が、耳から通って体の中心まで染みる声が、広がって広がって。溜まっていく、喉の奥の方にずっと。溜まって、ゆらゆら揺れる。
「来年の夏、もう一度初雪を降らそう」
息が、詰まった。
受け皿の底が浅いのはわかっていた。頭の真ん中を包み込んだ晃の言葉、それにぐらりと傾けられて、縁を超えていっきに零れだす。布団を握った手に力が篭もって、携帯を持った方は痛いほど握っていた。せり上がってくる呼吸を抑え込もうとして、声が出せない。
「当然だろ」。絞り出した言葉は、言い訳も出来ないほど掠れて震えてしまった。晃が、笑う音が聞こえる。
「泣くなよキャプテン」

「泣いてねぇ、」
「まったく」
虚勢は無意味、そんなのわかっているけれど。すれ違ってぐるぐる話して、二年間ずっとずっとそうだった。何度も話し合った、それでも何度もすれ違う、だけど晃はいつだって最後にはそう言ってくれて、追いつくよと笑ってくれて。昔からそうだ、あいつの強さに俺はいつまでも手が届かない。一番辛いのは、晃だというのに。
「でも、ガヤが泣き虫だから俺は笑ってられるんだよ」
機械越しに聞こえたその言葉に、やっぱりこいつにはかなわねぇと思った。

「あ、鈴木君」
帰り道、見覚えのある背中とラケットバッグを呼び止めた。彼は振り向いて、驚いたように俺を見る。「初瀬」。びっくりした声で、一言。
「俺に、なんか用？」
「うーん、そういうわけじゃないけど。一度ゆっくり話してみたかったんだよね。暇？」
「帰るだけだから、暇だけど」
止まってくれた彼の隣に追いついて、歩き出す。普通に歩くよりゆっくり、俺のスピードに合わせてちらちらこっちを見ながら彼は歩く。少しだけ申し訳なくなった。と同時に、合わせようとする素振りも見せずに同じスピードで歩いてくれる、あいつのことをすごいと思った。
「ガヤと仲悪いので有名だよね、鈴木君」
「あー、……やっぱ有名だよな」
「うん、軟式と硬式の仲の悪さというか、君達の犬猿の仲っぷりは」
会う度喧嘩してるでしょ。言ったら、彼は気まずそうに俺から目を逸らす。実際に喧嘩している場面を見たのは何度もないけれど、二人の仲の悪さを知らない人はいないんじゃないかと思うほどには

周知の事実で。「あいつらどうにかできねぇかな、」と坂野君に溜息をつかれたのは、一度や二度じゃない。
「初瀬って、雪谷と仲いいんだろ」
「そうだね、付き合いはかなり長いよ。今年で十年目、かな」
十年。鸚鵡返し、鈴木君は目を丸くした。
「俺もあいつも、一緒にテニスすることしか考えてなかったからね。普通、ダブルスペアって実はそんなに仲良くなかったりとかするんだけど」
「そうなの？」
「責任を、押し付ける相手がいるってことだろ？」
シングルス専門だと聞いた彼にとって、きっと自分のミスは自分一人のもの。責任転嫁の場所も方法も存在しない。そういうもんなのか。呟いた彼に、「全部が全部じゃないよ」とは釘を刺した。あくまで俺の統計、だって例外は俺達だ。
「初瀬は、雪谷から俺の話聞いてねぇの？　あいつみてーにむかつくって思わねぇの？」
「全然？　というか、ガヤはあんまり君の話をしないよ。意外？」
「……意外だ。すっげぇ愚痴られてんのかと思った」
ガヤと鈴木君が、犬猿の仲なことは有名。だけれど、ガヤは滅多に俺の前で彼の話をしない。俺が知っているいろいろなことの情報源は、大体が坂野君経由。別にこっちから聞く理由もないからわざわざ話題は持ちかけないけれど、嫌いで大嫌いで有名なのが嘘のようなほど。
「俺は、君のこと好きとか嫌いとか言えるほど君のことを知らないしね。まあ、ただちょっと羨ましいだけ」
「羨ましい？　俺が？」
彼は、一瞬歩みを緩めて眉を顰めた。嫌味に聞こえただろうか、彼が自分のテニスの腕にコンプレックスを抱いていることも聞いている。今はこんな状態だとしても、一応俺の最高成績は全国大会四位なわけで、今ではもう現実味もなにもないのだけれど。頂点を目

指していたあの頃の気持ちが今はもううまく思い出せない。てっぺんを目指す、輪から外れてしまったから。
「だって、君は俺の知らない、知れないガヤを知ってるんだから」
もっとも、それしか知らないのだろうけれど。
鈴木君はまた目を見開いた。「どういうことだ」。当たり前の質問、だから口を開いた。こんなことを話したのがバレたら、さすがにガヤには怒られるかもしれない。でも、だけど。
「ガヤはね、君が知っているよりもずっとずっと弱くて、泣き虫な奴なんだよ」
ついに、彼の歩みが止まった。俺の半歩後ろ、「え、」と声を詰まらせる。ラケットバッグの持ち手を握る手に、入っている力は必要以上。「あいつ、が？」と、信じられないような表情で彼は呟いた。それはそうだろう、だって、彼の知っているガヤからはきっと想像できない。だけど。
「それで、あいつはそんな自分が誰より何より大嫌いだ」
「嘘だろ、あいつが？　何言ってんだよ、あいつは」
「君の知ってるガヤは、慇懃無礼で自信過剰で、そういうむかつく奴なんだっけ？」
立ち止まった鈴木君に、振り返って問いかける。俺にとっては、そっちの方がよっぽど「らしくない」。だけど、そんなことを言ってもきっと信じてもらえないのだろう。鈴木君が見ている、持っているガヤのイメージが俺にはきちんと理解できない。話には聞くけれど、それはどうしてもあいつと重ならない。きっと、それは今彼が抱いている途方もない違和感と、同じもの。
「俺は、誰よりもガヤのことを知ってるよ。それは、自信とかじゃなくてただの事実。だけどね、鈴木君。君の知ってるガヤを俺は知らないんだ。俺は、泣き虫で弱虫なガヤを誰よりも知ってるから、ガヤは大嫌いな弱いあいつを、俺の前では隠せない」
「雪谷、が」
「信じられないかな、別に信じなくてもいいよ。俺が言った事なん

て、忘れていいや」
　もう一度体を反転させて、歩き出す。数秒してから、鈴木君は気が付いたように追ってきた。やっぱり、俺に歩調を合わせて。進む度に背中のラケットバッグが上下に揺れる。その動きと、背中にこすれる音とが、ひどく懐かしい。二年前には毎日感じていた重さも、思い出せない。
「君の中でのガヤは、ずっとそういうむかつく奴でいい。軟式を馬鹿にして、ガヤと喧嘩する硬式テニス部のキャプテンでいてよ。あいつの弱い部分なんて、きっと君は見ちゃ駄目だ」
　どうして、俺は彼にこの話をしたのだろう。なんて、理由はわかっている。それは、ほんのちょっとの嫉妬心。ずっとずっと一緒にいた、ペアとしての。悔しかった、だからつい言ってしまった。彼の知らないガヤがいることを、俺も大概浅はかだ。今更ではあるのだけど。
「ガヤがあいつでいるために、きっと君が必要なんだろうね」
　何も知らないのは、彼じゃなくてもしかしたら俺の方なのかもしれない。本当のあいつを隅から隅まで、それこそあいつ以上に知ってしまったから。だからこそ、見えなくなっているものがあるのかもしれない。それも、今更だ。
　鈴木君は何も言わなかった。何も言わないまま、ただ歩く。それでも彼は俺の隣に居続けた。ほんの少し駆け出してしまえば、俺は絶対に彼に追いつくことなど出来ないのに。両手でラケットバッグの持ち手を強く握ったまま、何か考え込むようにひたすら歩く。駅は、すぐ目の前だ。
「いきなり、変なこと話してごめんね。ほんとに、忘れていいから」
　家に帰るための曲がり角、鈴木君に声をかけた。太陽が駅の向こう側に沈む、橙は曇り空の後ろにうっすりと見えた。返事は返ってこない、彼はまだ俯いていた。別れる最初の一歩を踏み出すタイミングを掴めずにいたら、ようやく彼が口を開く。「初瀬」。俺の名前を呼ぶ声が、ひゅうと鳴る風と重なった。前髪が瞼を擽る。

「俺は、雪谷が大嫌いだ」
久しぶりにこっちを見た彼の瞳は、吐き捨てるような言葉とは正反対だった。困惑と悲哀を混ぜた色が、それでも真っ直ぐだったから。俺は、頷いた。
「ありがとう」
彼は優しい人だと思った。笑って見せたら、張り詰めた表情が少し緩む。「じゃあな」。短い言葉、最後には小さく笑って彼は駅の方へ駆け出した。きっと頭の中はぐちゃぐちゃで、俺がかき乱して詰め込んだ、受け入れ難い事実が渦巻いていて、それでも彼は俺の意図をきちんと読み取った。それを伝える、一番短い言葉さえ選んで。
前に突いた松葉杖に体重を乗せる、当たり前になった動作ともう二年。二年間もラケットを持っていないのか、そう考えたら急に恋しくなった。グリップの感触すら、上手く思い出せないのが悲しくなるのだって今更なのに。
ガヤ、俺だって怖いんだ。俺がお前の隣に居られないうちに、俺の知らないお前がいたことが。俺がお前の隣に戻ったとしても、昔の俺達には戻れないんじゃないか、なんて考えることが。二年前から、変わらないなんて無理な話。だから。
いつもよりほんの少し重い気持ちは、くすんだ夕焼けのせいにした。

似てるようで違うようで（前編）

最後に話をした時以来、どうにも雪谷と顔が合わせられなかった。今まで通り、がうまく思い出せない。あいつに気遣って言葉を選んだことなんて一度もないし、きっとあいつもそう。だから、本気で地雷を踏んだあの時からずっと。口に出していい言葉が、見あたらない。なんて。あいつを傷つけることを怖がる自分がいることにひどく笑えた。どうだっていいはずなのに、あんな奴。

「ハル」

昼休みの中頃、坂野が教室に来た。弁当を食べていた俺の机に左手で自分の弁当箱を置いて、右手で隣の席から勝手に椅子を奪って反対側に座る。

「雪谷から伝言。明日、軟式の団体戦がクレーコートの会場であるから、今日の練習は軟式にクレーの方使わせてくれってさ」

「あー、うん。いーよそんくらい、っつっといて」

「お前も雪谷もほんとに相手のメアド知らねぇの？」

「知りたくもねぇ」

なんかあったときどうすんだよ。坂野がそう言って溜息をつく、だけれど知る気なんてさらさらない。「お前が知ってんだからいいだろ」と返して卵焼きを口に放り込む。坂野はそれ以上そのことに突っ込んでは来なかった。今更と言えば、今更な話。

「ハル」

「なに？」

「なんかあった？」

坂野の顔が真っ直ぐこっちを向いていた、から思わず逸らした。

「別に」。それが嘘なこと、気付かれなかったわけはないのだけれど。そのことにも、何も言われなかった。坂野は何も言わないまま、弁当箱を開く。

「あんまり、首突っ込みすぎねぇほうがいいと思うぞ」

「え？」
今度は弁当箱に視線を落としたまま、その言葉。思い当たる節は、ひとつしかない、けれど。
「嫌いなくれぇがちょうどいいだろうから、お前等は」
その一言に、リフレインしたのはこの前の初瀬との会話。抽象的な言葉が物語る、「全部知っている」こと。どいつもこいつもそう言う、当たり前なのに、そんなこと今更。今更、何も変わるわけがない。
「心配されなくたって、雪谷のことは嫌ぇだ」
今度はミニトマト、口の中に広がる酸味を咀嚼して、顔はまだ上げない。「そりゃよかった、」の声と同時に、坂野が笑う音が聞こえた。なんだよ、顔を上げて問うたら、坂野は困ったように眉を顰めて笑っていた。
「お前、お人好しだからさ」
俺を見て坂野の発した、その言葉の意味はよくわからなかったけれど。とりあえず、「んなことねぇよ」とは答えておいた。

部活の終わった後、相変わらず調子がよくなかったから坂野と少し打ってから部室に戻った。戻る道の途中、クレーコートの前を通ったらまだ軟式が部活をやっていて。歩きながらちらりと覗いたけれど、あいつの姿は見付ける前に通り過ぎた。気にしているのに気が付かれたのか、隣から坂野の溜息が聞こえる。
「ハル、」
「なんでもねぇよ」
歩みを早めた坂野の後ろを小走りで追った。そうだ、軟式のことなんてどうだっていい。俺は硬式のキャプテンで、やってきたのだってずっと硬式、大切なのだって硬式だけ。軟式なんてマイナーで、子供がやるようなレベルの低いスポーツで、ただただキャプテンのむかつく部活。それだけ、俺にとっての軟式とあいつなんてそれだけ。どうでもいい、あいつの、ことなんて。

頭ではいくらでもわかっていた。だって、前からずっとずっとそう思っていたのだから。虚勢を張っているわけでもなんでもない、俺にとっての軟式とあいつはたしかにそうだった。それは今でもそうなはずなのに、変わるわけがないというのに。どうしてだろうか、この前のあいつの顔が頭から離れない。

何が変わったのかはわからない、なにも変わってなんかいないのかもしれない。だけれど、やっぱり違った。なにか、むかつく以外の感情があった。あいつに、対して。それは、ひどくひどく。

「なあ、晴也」

「なに」

たった一文字増えただけなのに、響きが変わった。グランド横、部室棟への細い道。俺の名前を呼んだ坂野は、相変わらず一歩前に居た。振り返らない、ただ前だけ見て。十センチ違う身長、歩幅を合わせるのは諦めた。

「お前は、雪谷のこと嫌いだろ。昼も言ったけど、それでいいと俺も思うんだけど」

今日のこいつはよくわからない。そう、思った。昼のことにしろ、今にしろ。考えたら、気が付いた。坂野が言ってること、やけにシンクロすると思ったらこれは、そうだ。こいつが言ってるのも、俺に言いたいのも、全部全部初瀬が俺に話したことと同じ。初瀬から話を聞いたのだろうか、わからないけれど。俺と雪谷の関係が、おかしくなったことを咎めるような、そんな。

「でも、それはさ。憎んでる、とは違うんじゃねぇかな」

だから、その坂野の言葉に少し驚いた。

俺が純粋に、ただ雪谷のことをうざいとむかつくと、それだけと思えなくなったことを見透かされて。初瀬は、やんわりとそれを咎めた。昼の坂野も、同じようなことを言った。それはわかってる、それが決して間違っていないこともわかっている。

「お前はお人好しだからさ、いくら雪谷のこと嫌いでも、憎んでるってわけじゃねぇから。だから、あいつのこと気になるんじゃねぇ

の？　ほっとけないんじゃねぇの」
　坂野は、やっぱり前を見ていた。その背中に向かって、開いた唇から。言葉は、出なかった。何も言えない、言う言葉がない。なんて返せばいいのか、わからない。
「初瀬とちょっと話したし、それで昼はあんなこと言ったんだけど。俺が心配だったのは、あんまあいつのことに首突っ込みすぎるとさ、お前雪谷に同情し過ぎちまうんじゃねぇかって」
「んなこと、」
「お前、ああいうの放っとけねぇだろ。初瀬からあいつの話聞いて、余計そうなったろ」
　初瀬も余計なこと言ったよな。坂野が肩を竦める、後ろ姿。でかいな、とふと思った。視界を遮る背中、いつも隣にいたから。今、急に気が付いた。
「だから、あんま首突っ込まねぇようにさ、今まで通り適当に嫌ってくれりゃいいのかな、とか思ってたんだけど」
　呟くように語って、坂野は急に足を止めた。いきなりのことに、思わずぶつかりそうになってこっちも急ブレーキ。何か考えるように、日の暮れてきた空を仰いで。それから、坂野はようやくこっちを振り返った。
「雪谷のことさ、関わるなとも憎めとも言えねぇや。あいつのこと、教えたのは俺なわけだし。やっぱ言うべきじゃなかったかな、とか後悔しても今更なんだけど、さ」
　さっきから一貫性を持たない、支離滅裂な言葉はいつもの坂野らしくない。宙を見上げながら言葉を探す。きっと何を言いたいのかこいつ自身もきちんとはわかっていなくて、だから。
「俺も初瀬もお前にいろいろ話しちまって、それでお前の雪谷への印象が変わっちまって、それを無理矢理変わってないことにさせるのってさ、俺達のわがままなんじゃねぇのかなって」
　言いたいことはわかるような気がする、わからないような気がする。「変わってほしくないのは、お前や雪谷じゃなくて俺や初瀬の

方なんだよ、」と続く言葉。いくつもの意味にとれる言い回し、だけれどどの意味だかは自然にわかったような。これも、そんな気がしただけ。

「お前が雪谷に同情しちまうんだったらさ、今まで通り悪態つきあえないっつーならさ。……それは、それでいいんじゃねぇかな、って。変わったって、いいんじゃねぇかってさ。初瀬と話してから、ずっと考えてた」

変わってしまった。それは、確かに事実なのだと思う。だって、現に俺は今、雪谷と前のように会話が出来る自信がない。顔を合わせて悪態をついて喧嘩して、だけどきっとどこかで冷めてしまう。そんな気がする。今まで言葉を選んだ事なんてないから、きっと選べずに止まってしまう。それはもう、結果。

坂野のことをすごいと思った。俺は、こいつに何を相談したわけでもない。初瀬にもそう。だけど、いつの間にか全部わかられていた。俺が雪谷に対して抱いてしまった感情、考えていること、坂野には全部伝わっていた。それに今更気が付いた。こいつがあまりにも何もかも知っていたから、全部が全部正しかったから。俺は、何も言わない。ただ、頷いた。

「晴也」

やっぱり慣れないその呼ばれ方、十センチ上を見上げた。視線はなかなか合わない、俺の視界の真ん中が捉えたのは橙色の空に浮かぶ雲。橙の温かさと空気の冷たさは、見事に相反していた。冷たい風に引きつる頬、空気は痛いほどなのに色だけやわらかい。

「お前は優しいからさ。大丈夫だよ、お前の思ったとおりで」

ようやく俺の目を見た坂野は、笑っていた。微妙な、表情だった。

「……サンキュ、」

もらった答えは抽象的で曖昧、だったけれど確かに探していたものだった。

また振り返って、歩き出した坂野の後ろ。黒になる前の、冷たい橙を右手で握りつぶした。

着替えも終わって、坂野と別れて向かった最寄り駅。あいつと話をしていたら、いつもより随分と遅い時間になっていた。家に向かう人々が改札に群がって、人波が途切れることなく動く。この分だと電車も混んでいるだろう、めんどくさい。溜息を付いて辺りを見回して、違和感に気が付いた。

あっちでもこっちでも、改札を目指す人が前の人にくっついて歩く。滞らない人の動きの一角、そこだけが固まっていた。そいつは一人、券売機の横でずっと立ち止まっていた。目の前を通る人に何度も遮られて、だけど止まっている違和感、それが気になってちらりと覗いたら。そいつの背中にあったのは、見覚えのある鞄だった。紺色の縦に長い、すぐにそれとわかる独特な形。あれ、と思って人混みを横にかき分けた。やっぱり、そうだ。あのラケットバッグは、あいつの。横顔だったけれど、姿が見えて確信した。雪谷だ。

なにをしているのだろうか。あいつは、多分こっちには気が付いていない。雪谷の家は確か学校から徒歩圏内で、少なくともこの駅は使わない。軟式で揃えたウィンドブレーカー姿、右手には携帯電話。左腕で、抱えていたのはやっぱり見覚えのある空色のラケット。あいつが、いつも持っている。

（……あ、）

もう一歩近付いたら、見えた。雪谷が抱えているラケットのヘッドは、ガットの縦糸が一本切れていた。足音とホームから漏れるアナウンスでざわめく構内、携帯を耳に当てた雪谷が話している内容は聞き取れなかったけれど。昼に坂野から言われたことを思いだした。軟式は、明日団体戦がある。

電話を耳から離して、雪谷が眉を顰めて溜息。きっと、ガットを張り替えてくれる店を探しているのだろう。だけれど、もうこんな時間で、しかも今日中にだなんて。そんなの、無理に決まっている。

そのまま、踵を返そうと思った。向こうはこっちに気が付いていないし、話しかける理由もないし、第一気まずいし。あいつのこと

だ、替えのラケットの一本や二本持っていない方がおかしいだろうし、そもそも俺があいつを気にかけてやる理由なんてないわけだし。わざわざ話しかける意味もない。大体、俺はあいつが嫌いだし軟式だって嫌いだし。あいつがラケット駄目にして試合出れなくなったところで、俺にはなんの関係もない。硬式に不利になるわけでもないし、むしろあいつは今まで散々硬式のことを馬鹿にしてきたわけだし。あいつがいなきゃ、軟式はろくに勝てない。ざまーみろ、普段の行いの報いだ。せいぜい、負けて悔しがればいい、馬鹿にしてやるから。

――なんて、思えなかった。いくら嫌いだって、知っている。こいつがどれだけ軟式が好きか、どれだけテニスが好きか。どれだけ、一生懸命か。知っているから、とてもじゃないけれど無視なんて出来なかった。何だかんだで、同じだから。好きなのも頑張っているのも。わかってしまうから。

「おい、雪谷。なにしてんの？」

「鈴木、」

声をかけたら、雪谷は目を丸くした。俺がガットに目をやっているのに気付いてか、それを握る腕に力が篭もって。「お前には関係ねぇだろ」。返してきた言葉、焦りが滲んでいるのは明らか。

「ガット切れちまったの？　軟式、明日大会なんだろ」

「うっせえ、放っとけよ」

「いくら探したって、今からじゃ今日中に貼り替えてくれるとこなんてねぇと思うけど？　替えのラケットくれー持ってんじゃねぇの」

「うるせぇな、なんだっていいだろ」

言いながらまた携帯を耳に当てる。だけれど、数十秒で通話は終わった。もう日も沈みきって、こんな時間に今日中だなんて無理な注文を受けてくれる店なんて。あるわけがない、雪谷だってきっとわかっているのだろう。

「なあ、雪谷」

声をかけても返事はなかった。どうしてここまでこのラケットに

固執しているのか、俺は知らない。普段使っているラケットがもう一本でもあるのなら、ガットを張り替えたばかりのラケットを試合で使おうだなんて、こいつクラスの選手が思うわけもないだろうに。その辺りの事情は、わからないけれど。

「どうしても、そのラケット明日使いてぇの？」

聞いたら、雪谷はちらりとだけこっちを見た。それからまた携帯の画面に視線を戻して、吐き捨てるように。

「そうだったら、どうにかしてくれるっつーのかよ」

「してやる、って言うけど？」

言い切ったら、今度こそ雪谷は固まった。開いていた携帯を二つ折り、怪訝な顔でこっちを見てくる。どういう意味だ、問われる前にもう一度口を開く。

「で、どうなの？」

雪谷はこめかみに手をやって、何度かがしがしと頭を掻いた。それから、溜息。「どうにかなんなら、そうしてぇよ」。呟くようだったけれど、そう答えた。答えは聞いた、ポケットから携帯電話を取り出して。短縮ダイヤルは一番、三コールで出たってことはきっと仕事なんてそんなにない。

「あ、親父。急で悪いんだけどさ、今からラケット一本ガット張り替えてくんねぇ？　軟式、なんだけど。知り合いが困ってんだよ、頼む」

きょとんとした表情の雪谷なんて、なかなか見れないものだろう。携帯の向こうから返ってきた返事は快諾。サンキュ、と返して通話を切る。状況が飲み込めない様子の雪谷の、右腕を掴んだ。

「ほら、行くぞ」

「どこに、」

「俺んち個人経営のスポーツ店なんだよ。親父が、ガットの張り替え出来るから」

ちょっと遠いけど、どうにかなるだけいいだろ。雪谷の腕を掴んだまま、人混みに潜り込んで歩き出す。雪谷は唖然としたのか、離

せとも言わずにただ付いてきた。ラケットを、左腕でしっかり抱えたまま。

「大事なもんなのか、そのラケット」

ホームにたどり着いて、手を離してから聞いた。雪谷は肩からラケットバッグを降ろして、その中にラケットをしまい込んだ。「これ以外で、試合に出たくねぇんだよ」。ぽつり、電車の音に掻き消されそうなくらいの声で。それでも、聞こえた。

「鈴木」

もう一度ラケットバッグを背負い直して、雪谷がこっちを向く。俺の顔の横辺りを、ふらふらと視線が泳ぐ。あー、とか意味のない言葉をいくつか発してから、また右手で頭を掻いて。

「悪ぃ、な。助かる」

あまりに珍しい言葉すぎて、それでもきちんと言うのだと思ったら思わず笑えた。笑ってしまったら、「なんだよ」、と不機嫌そうな顔と声。

「なんでもねぇよ」

笑いながら発した言葉と同時に、人をたくさん詰め込んだ電車が軋む音を立てる。いつもはひとりで乗り込む、いつもの電車。ラケットバッグごと体を押し込む姿が、俺の他にもう一人いること。それが、あろうことかこいつだって、こと。それもなんだか、ひどくおかしかった。

似てるようで違うようで（後編）

「ただいま」
「お邪魔します」
家の玄関ではなくて店の入り口から中に入る。おかえりを言った父親は、ラケットコーナーで客の物であろうラケットのガットを張り替えていた。それを見た雪谷が、頭を下げるのが視界の端に入った。
「すみません、いきなり」
「君が、晴也の言っていた軟式の子かい？」
「はい。ご迷惑をおかけします」
「迷惑なんかじゃないさ、晴也がいつもお世話になってるんだからね」
こいつに世話になんかなってねぇ。俺がそう思ったのと同時に、多分雪谷も俺の世話なんてした気はねぇと思っているのだろう。雪谷が曖昧な返事をするのが聞こえた。
「ガットはそこに並んでるから選んどいて。普段使ってるのがなかったら申し訳ないけど」
「ありがとうございます」
親父に指された棚に向かって行く雪谷を見ながら、軟式のコーナーなんて何があるかろくに見たこともないことに気が付いた。ガットと、細いラケット、それからゴムボールと、あのポンプは空気を入れるためのものだろうか。思いの外に知らないものがいくつもあった。雪谷は、棚をさっと見て迷わずひとつを手に取った。多分、それがいつも使っているものなのだろう。軟式のガットの善し悪しなんて全くわからない。
「……君、名前は？」
「雪谷、です」
振り返った雪谷に、親父が手を止めて問いかけた。雪谷は一瞬き

ょとんとしながらも自分の苗字を名乗る。するとふいに親父の表情が変わった。満面の笑み、それから手を叩いて。
「そうか、どうりで見たことがある顔な気がしたんだ。中学の頃に、軟式で騒がれていた雪谷くんだろう？」
親父の言葉に、俺も雪谷も眼を丸くした。そうだと思います、なんてしどろもどろな返事を隣で雪谷がする。知っていた、だなんてことが初耳だ。俺は、同じ高校じゃなかったらこいつのことなんてこれっぽっちも知らなかっただろうから。
「え、なに親父こいつ知ってたの？」
「軟式の雑誌に一時期よく載ってたぞ。晴也お前こんな有名人と友達だったのか？」
「別に友達ってわけじゃねぇよ、こいつ軟式のキャプテンだから知り合いになっただけ」
そうか、だとか一人でぶつぶつ言ってから、親父は雪谷からガットとラケットを受け取った。「君ほどのプレイヤーのラケットだと思うと緊張するな」なんて言いながら。雪谷はなんと答えればいいかわからない様子で、へたくそな愛想笑いを浮かべながら適当に相槌、それから謙遜で短い言葉を並べていた。
「明日は、このラケットで大会に出るのかい？」
「はい。これ以外で、プレーしたくなくて」
その言葉だけははっきりしていた。張り替えてすぐのプレーの危険性なんて、きっとこいつには話すまでもない。親父もそう判断したのだろうか、なにも言わなかった。グリップもエッジガードも丁寧に貼られた、硬式の物と比べると細身な空色のラケットを手にとって、親父はそれを興味深そうに眺めていた。
「随分と長い間使っているようだね。それにしては綺麗だ」
「まだ、だめにしたくないんで」
「物を大事にする精神をあいつにも教えてやってくれないか」
「うっせ」
余計なことを言いやがった親父に向かって舌を出せば、肩を竦め

られた。それからまた雪谷に向き直って、「テンションは？」と。ガットの張り具合を示すその言葉に、雪谷は迷わず数字を返した。
「三十一でお願いします」
「……え、」
予想外、というよりそれはもはや違和感を通り越した。テンション、と聞いてイメージにぴったり当てはまる数字から随分離れた。思わず驚いて声を上げれば親父が笑いながらこっちを見た。
「そんなに不思議か？」
「だって、俺のラケット今五十五とかで張ってるし」
「は？」
今度は雪谷が眼を丸くする番だった。きっと感じたのはさっき俺が覚えたのと同じ違和感で、そんな俺等二人の反応が面白かったらしく親父が肩を震わせる。「軟式で三十一は強い方だぞ」と言われて、雪谷は頷いたけれど俺にはやっぱり理解が出来ないわけで。三十一のテンションで張られたガットなんて、もうなんなのかすらよくわからない。いろいろと違うことは知っていたけれど、こんなところまで。
「今日中にやるのが後少しあるから、一時間とちょっとくらいはかかると思うけど大丈夫かい？」
「はい。すみません、本当に助かります。よろしくお願いします」
雪谷はまた親父に深々と頭を下げた。「丁寧にありがとう」と親父は笑ってから、「お前もこれくらい礼儀正しくなれよ」と俺の方を向いて言って来やがった。誰がこいつなんか見習うもんか、の言葉は一応飲み込んでおく。無愛想ではあるけれど、誠実に礼儀を払っている姿が意外といえば意外だった。予想外、というよりは普段とのギャップが大きすぎて。
「晴也、家の方上げてあげていいから少し待ってもらって」
「……おう」
そうなるだろう、とは思っていたけれど。こいつを、家に上げる日が来るだなんて。そっちの方が予想外、に相応しい気がした。

こっち、と雪谷を手招きして、レジの横にある「ＳＴＡＦＦ　ＯＮＬＹ」の扉に向かった。靴を脱いで開けた扉をくぐり抜けると、そこはもう自宅の一階の廊下だ。玄関にあるのよりは小さな下駄箱が置いてあるそこに靴を並べてから、「ただいま」とリビングに向かって声を掛ける。独特の構造に驚いたのか、雪谷は俺の後ろでしきりに辺りを見回していた。

「おかえり、遅かったじゃない。……あれ？　お客さん？」

エプロン姿で掛けてきた母親が、雪谷を目に留めて首を傾げた。

「お邪魔してます」と頭を下げて、どう話そうか迷っているらしい雪谷の代わりに事情を説明した。の、だけれど。全部話し終わらないうちに、母親は雪谷に近付いていった。近視の母親は雪谷にぐいと顔を近付けて、雪谷はびくりと半歩後ずさった。

「雪谷くん？」

「え、」

どこまで有名なんだ、こいつ。雪谷はまた固まった。

「母さんまで知ってんの？」

「あ、やっぱり雪谷くんなの？　晴也と同じ高校だとは知ってたんだけどまさかこんなとこでお目にかかれるなんて！」

「え、あ……。ありがとう、ございます」

母親のテンションの上がり方に、雪谷が困惑しているのがよくわかった。ソフトテニスなんてスポーツは決してメジャーじゃないのに、どうしてこいつはここまで有名なんだろうか。スポーツ店を経営していて、両親共にテニス経験者、なんて特殊性はあるものの、俺の知っている限り二人とも硬式だというのに。

「私の知り合いで軟式出身の方が話題にしててね。テレビでも、ローカルで特集してた番組とかみせてもらったことがあるのよ。でもやっぱり実際に見た方が格好いいわね！」

「え、っと……」

「せめて眼鏡掛けて言えよド近眼のくせに。雪谷引いてんぞ」

なにかとミーハーなのは昔から知っていたけれど。溜息をついて言えば、「ごめんなさいねー」と間延びした声をあげて離れる。距離が離れて、雪谷があからさまに安堵した表情になるのがわかって笑えた。
「親御さんに連絡した？　遅くなるみたいだし、心配なさるんじゃない？」
「いえ、まだ……」
「ちゃんと連絡しとくのよ？　晴也、あんたの部屋汚いんだからリビング通してあげて」
「わかったよ」
部屋が汚いことは否定できない。廊下を歩いて突き当たりのリビングに雪谷を連れて行ったけれど、結局母親も最後まで付いてきた。多分、料理中だったはずなのに。
部屋の隅にラケットバッグを放りだして、雪谷の分もそこに並べておく。本当はシャワーを浴びて着替えたいところだけど、さすがにそういうわけにはいかなかった。雪谷は、ウィンドブレーカーのポケットから、改めてみると随分型の古い携帯を取りだした。母親に言われたとおり、家に連絡をしようとしているのだろう。ボタンを押す前に、母親が雪谷を呼び止めた。
「雪谷くん、遅くなるなら夜ご飯食べていかない？」
「でも、そこまでご迷惑をおかけするわけには、」
「迷惑なんかじゃないわよ。いつも晴也一人しかいないしね。いろいろ話も聞いてみたいし、こっちからお願いしたいくらいなんだけど」
「え、こいつと飯食うの」
「なによ晴也、その言いぐさは」
「別にー」
今日起こることが予想外の展開であることには、もう慣れた。昨日までなら全く想像も出来なかったけれど、正直もうなんだっていい気分だ。さすがに俺の親の前じゃ雪谷も得意の軽口は叩けないわ

けだし、割と人見知りで口下手だってことまで判明してしまったし。
「じゃあ、お言葉に甘えていいですか」
「もちろん」
もうすぐ出来るから晴也と待っててね。そう言って母親はキッチンに戻っていった。それと同時に、雪谷は携帯のボタンを押して耳に当てた。心持ち俺から遠ざかって、きっと家族に電話をしているのだろう。キッチンから聞こえる音で声はよく聞こえなかった。雪谷の家族構成なんて、知っているわけもないけれど知らないことに改めて気が付いた。
ソファーに座って待っていたら、電話は終わったのか近付いてきた。とりあえず、「座れよ」と声を掛けたら、俺がいるのと反対側の端に腰を下ろす。会話なんてあるわけもなくて、互いに違う方向を見ながら空気はやたらと気まずかった。二人で空間を共有したことなんて数えるほどしかなくて、その大半は事務連絡かしょうもない喧嘩かのどっちかだったから。空気が持たない。
「……いい両親だな」
口を開いたのは、あろうことか雪谷の方だった。俺の方は見ていなかったけれど、ぽつりと。
「そうか？　結構過保護だし、めんどくせぇし」
「お人好しは遺伝か？」
「けなされてんの、俺」
「そのつもりはねぇけど」
意図が掴めない。だって、いつものこいつの言葉の意図は俺を苛つかせることだけだから、ほとんど考えたこともなかったわけで。そうじゃない会話なんてろくにしたことがない。だから、そうじゃない会話のときはいつだって意図が掴めない。わかりにくい奴。
「親と仲良くねぇの？」
「そういうわけじゃねぇよ。あんま家にいねぇだけ」
「寂しくねぇの、それ」
「別に、きょうだいいるし」

「……へえ」
なんでこんな会話をしているのだろう。それは多分、互いに思っていたことだと思う。たわいもない会話、なんて一生出来ないと思っていたしする予定もなかったのに。どうしてだろうか、誰が聞いているわけでもないのに嫌味を言う気がまったく起きない。普段だったら、顔を見るだけで腹が立つ奴が隣にいるというのに。不思議な気分だった。
「あのラケット、なんか思い入れあんの」
自分が、雪谷との会話のネタを探していることに気が付いて思わず心の中で笑う。そんなの、今までにはあり得なかったこと。会話なんてなければないほうがよかった。だって、あったとしてもそれは苛々することでしかなかったから。
「晃と組んでた時から、使ってたやつだから。あれ以外、使う気になれねぇだけ」
意外と素直に答えが返ってきたことに驚いた。「お前には関係ねぇだろ」とか一蹴されるのがいつものことだというのに。
晃、それが初瀬のことだと気付くのに少し時間がかかった。こいつが義理堅い人間であることは、坂野から聞いた話の端々でなんとなくわかっていたけれど。それはやっぱりあまりにいつもの、俺の知っているこいつとはほど遠くて。微妙な気分になる。ついでに空気もまた微妙になった。最初からといえば、最初からだけれど。
「なあ、雪谷」
「なに」
もう、こうなってしまったら、だ。雪谷の方を向いて話しかけたら、ようやくこっちを振り向いた。いつもの嫌味な笑顔がない表情。きっと、これが素の顔なのだろう。
「お前さ、いい加減メアド教えろよ。橋本とか坂野通したり、めんどくせぇだろ」
坂野に聞かれたら、腹を抱えて笑われそうなほどに見え透いたこじつけの理屈。雪谷は一瞬怪訝そうな表情をしたけれど、携帯を取

りだして二つ折りのそれを片手で開いた。
「お前のメアドなんか知りたくもねぇ、っつったのはどこのどいつだ」
「電話帳にお前の名前があるなんて気持ち悪ぃ、ってお前も言ってただろーが」
ポケットから取り出した携帯をスライドさせて、何度かキーを打つ。こんな日が来るだなんて、本当に思いもしなかった。開いた自分のプロフィール、「こっちから送るぞ」と声をかけて。
「随分古い携帯だけど、赤外線機能あるよな？　それ」
「……馬鹿にすんなよ」
からかってみたら返ってきた鼻につく笑い方が、どうにも久しぶりに感じられた。

それから母さんと俺と雪谷、なんてわけのわからない三人で夕飯を食べて、俺は母さんが雪谷を質問攻めにするのを横から眺めていた。雪谷は割と淡々と答えていたけれど、やっぱり初瀬の話になると顔色が変わったり。初瀬との話も、きっと有名なのだろう。一度聞いたら忘れられない、ドラマみたいな展開なわけで。それでも、「応援してるから頑張ってね」の母親の言葉には笑って頷いていた。その笑い方も、初めて見た物のような気がして。
食べ終わってすぐ、親父から連絡が入った。「今度は遊びに来てね」と手を振る母親に雪谷は丁重に礼を言ってから、二人で店に戻った。
「待たせてすまないな」
どうぞ、と親父が雪谷にラケットを差し出した。張りたてでガットだけ真っ白に浮いて見えるそれを両手で受け取って、「本当にありがとうございます」と雪谷は深々と頭を下げた。
「なあに、気にすることはないよ。試合、頑張ってきてくれればそれでいいさ」
「はい。……あの、お代は」

「ああ、ガット代だけでいいよ。張り替え代はサービスするさ」
「でも、こんな時間外にお願いしてしまいましたし、」
「気にすることはないよ、いつも晴也が世話になっているみたいだし」
雪谷は暫く迷ったような表情をしていたけれど、結局折れたらしく「ありがとうございます」とまた頭を下げる。それから、財布を出す前にもう一度軟式のコーナーに足を向けて、グリップを二本とエッジガードを一本、それから二つ入りの白いボールを手に取った。
「すみません、これお願いします」
「……君はいい子だな。まいどあり」
親父は笑ってレジを打つ。晴也も君くらい気が利けばな、の言葉にはさすがに反論しておいた。

「じゃあ、気をつけて帰るんだよ」
「本当に、お世話になりました。ありがとうございます」
店先まで見送りに来た親父に礼を言って、すっかり暗くなった道に雪谷は足を踏み出した。それを親父の後ろから見ながら、気が付いたら思わず呼び止めていた。雪谷。どうして、あそこであいつの名前を呼んだのかはよくわからない。雪谷が振り返ったのがわかる。それだけ目立っていた白いラケットバッグが裏側に回って、暗さに溶けて消えた。
「勝てよ」
なんで、あんな言葉が出たのだろう。あの時の自分はおかしかったと今なら思う、けれど。暗くて表情はよく見えなかったけれど、店の明かりのおかげで、雪谷が笑ったことだけはわかった。
「当然」
その一言だけを投げ出して、雪谷はくるりと振り返る。それから、真っ直ぐ歩いていって見えなくなる。
気にかかってしまったのは、やっぱりあいつのテニスに対する思いがわかってしまったからなのだと思う。俺はあいつほど、雪谷ほ

どうまくはないし結果だって残せていない。だけど、テニスが好きだという思いは知っている。そして、いろいろあるとはいえ同じ思いをあいつが持っていることだって知っている、わかってしまう。それはボールが違ったって、ラケットの重さやガットの張り方が違ったって、ルールが違ったって同じこと。テニスである以上。違うはずの、ないことだから。それをむげにすることは出来なかった。だって、俺は自分のテニスが好きな思いに目をつぶることなんてできないから。それが例えあいつの思いだったとしても、同じなのだから。

あの時の笑顔がどんな種類の物だったか、わかる気がしてしまった自分がどうにも不思議だったけれど。予想外には、慣れてしまった一日だった。

ノイズ混じりの曇り空（前編）

駅を出たら、冷たい風が真正面からぶつかってきた。手袋を忘れてかじかんだ手に息を吹きかけたら、両手の器の中は白く濁った。漏れ出してきたその白い空気を欠伸と共に飲み込んでから、冷たさに身震いする。肺いっぱいに吸い込んだ冷気が、酸素と共に赤血球に乗せられて、身体中の血管一本一本にまで染み渡っているような気分だ。背中に硬式テニス部を主張した黒とバーミリオンの派手なウィンドブレーカーのポケットに手を突っ込んで、乾いた落ち葉を踏みつけながら歩く。断続的に耳を付くぱりぱりとした音を聞きながら、そういえばウォークマンも忘れてきたことに気が付いた。溜息を付いて見上げた空は見事に真っ白で、並木道の裸の木はそれに浮かんでやたらに黒っぽく荒んで見えた。

秋の次には、当たり前のように冬がやってきた。俺は冬が嫌いだ。多分、テニス部であれば誰だって嫌いだと思う。この理不尽な寒さの中、外に出て風を切りながらかじかむ手でラケットを握り動かない体を動かすのは楽しいことではないし、寒さの度合いによってはもはやほとんど苦行だ。だけどそれでもテニスがしたくないのとは違う。だから今日も元々練習がなかったのを、坂野経由で先生に頼み込んで入れさせてもらっている。事務仕事の一切は、ほとんどが副キャプテンの担当だ。

そんなわけで今日は冬休み初日、ついでにいうと俺にはなんの意味もない行事であったクリスマスの翌日だ。部活終わりにあいつを校門まで迎えに来ていた、他校の坂野の彼女の顔を思い出して思わず溜息が漏れる。見かけたのはこれが初めてではないけれど、いつみても坂野の彼女だと思えないくらいには可愛かった。どうしてあいつはあそこまで見事に勝ち組なんだろうかと、独り身全員で肩を落としてその辺のファミレスに雪崩れ込んだのも、いい思い出といえばそうなのかもしれない。

昨日の終業式には案の定雪谷たちの表彰があった。団体戦準優勝で、一月の本戦行きが確定したそうだ。結果は坂野経由でとっくに伝わってはいたけれど、改めてそれを聞いて少しほっとしてしまった自分がいたことは、どうにも疑問だった。けれど雪谷が結果報告とお礼のためにうちの店に持ってきた菓子折のクッキーがやたらに美味かったから、その辺りには多少目を瞑ることにしている。

手を入れていたポケットから携帯電話を取り出すと、部活開始まではあと二十分、学校まではあと五分。これだけ寒いと早く来て自主練をする気にもなれずに、ついつい時間通りの登校になってしまう。準備は一年がしているだろうし、と携帯を閉じようとしたら、持っていた右手が唐突に振動しだした。背面液晶に表示された電話のマークと、「坂野亮」の三文字。

「もしもし？」

「あ、ハル？　今どこ？」

「どこって、学校行く途中の道だけど」

電話口から聞こえる坂野の声には焦りが顕著だった。なにかあったのだろうか。携帯を握る手に力がこもる。

「あとどんくらいで着く？」

「五分くらい。なんかあった？」

心持ち早歩きになりながら問うと、電話の向こうで坂野は一瞬黙り込んだ。

「軟式と、練習時間被らせちまったみたい」

「え、」

「ごめん、詳しいことは着いたら説明する」

「わかった、すぐ行く」

トラブルは冬休み早々だ。軟式と、ってことは。思い浮かべたのはムカつく方のあいつの顔だった。一度大きく溜息を付いて、学校への残りの道をテニスシューズで蹴り上げた。

「ハル！」

校門をくぐったら、オムニコートの前で坂野が手を振っていた。
普段練習前に集まる場所には軟式が溜まっていて、コートの準備をしに早めに来ている硬式の一年生はそこから少し離れた広い場所でボール籠と一緒に座り込んでいた。休みの日は硬式と軟式は午前と午後でコートを使い分けているから、両方が同じ時間に居るのは確かにあり得ないことだ。俺と同じウィンドブレーカーを着た坂野の前には、軟式のパープルのウィンドブレーカーが二人立っていた。朱色と紫色が揃うとどうにも毒々しい。そう感じたところで、去年も同じ事を考えたのを思い出した。あまりに協調性のない二色だ。
「何があったんだ？　被ったってどういうこと？」
「まあ、見ての通りなんだけど」
坂野に聞いたら、坂野は決まりが悪そうにメンバーが溜まっている場所に目を移し、そう言った。「なんで？」と重ねて聞いたら、軟式のキャプテンの雪谷と副キャプテンの橋本が目配せするのが見えた。
「うちも硬式も、予定立てんのって副キャプの俺らの仕事だろ？そんで、亮と冬休みの時間割り振ってた時には、軟式も硬式も今日は部活入れてなかったの」
「でも、軟式の顧問が今日の午前空いたっつーから、じゃあ俺たち午前部活やりてぇなって話になって、今日は硬式入ってねぇしいいかって入れたんだよ」
話し始めたのは橋本で、それが一段落付いたところで雪谷が続きを引き取った。ポケットに手を突っ込んだまま、横柄な態度には相変わらずいらっと来たけれど、とりあえず話は黙って聞いた。これからどうするかについては、否が応でも話し合わなくてはならない。相槌を打って続きを促せば、また橋本が口を開いた。
「そんで、俺は亮にメールしたんだよ。今日の午前軟式部活入れるけどいいか、って。そしたら大丈夫って返って来たから、じゃあ入れるかって確定したわけ」
「え、それいつ？」

「今月の十五日くらいだったと思う」
「ちょっと待てよ、俺が顧問の先生から今日部活やってもいいって言われたの二十日くらいだぜ？　坂野お前今日軟式ねぇって言ってたよな？」
　橋本の言ってることが本当だとしたら、俺がそう言った時点では、坂野は今日の午前に軟式の部活が入ってることは知っていたはずだ。明らかに矛盾しているけれど、俺は確かに坂野から軟式の部活は入っていないという旨を聞いた。だから顧問の先生に今日この時間に入れるよう頼んだわけだ。
　坂野は暫く黙った後に、「そうなんだよ」と一言だけ言って、首の後ろに手をやった。話しづらいことを話す前、坂野が決まって取る動作だ。
「なんでだかわかんねぇけど、俺翔太からのメール勘違いしてたみてぇでさ。今日の午前軟式あることすっかり忘れてて、ハルにそう言っちまったんだよ。今日来るまで全然気付かなかったし」
　視線を下に俯けて話をした後、長い溜息をついてから坂野は俺たち三人に向かって深々と頭を下げた。
「申し訳ない。全面的に俺のミスだ。雪谷、晴也、翔太、迷惑かけてごめん」
「え、ちょ、坂野、」
　いきなりのことにうろたえた俺の前で、雪谷と橋本は顔を見合わせて小さく溜息を付き、同時に頷いた。雪谷はそこを動かなかったけれど、橋本が坂野の方に一歩歩み寄った。橋本と坂野は仲が良い。その話をすると、決まって「キャプテン同士が仲が悪いからだ」と言われてしまうのだけど。
「そんなマジになんなよ亮。お前がミスすんなんて珍しいじゃん。大事なことメール一通で済まそうとした俺も悪いし」
「誰だってたまにはあんだろそんくらい。気にしねぇから頭上げろ」
「悪ぃ」
　申し訳なさそうに坂野は頭を上げて、情けねぇと一言溜息をつい

た。橋本の言うとおり、坂野は仕事はいつもしっかりとこなす。それこそ、どうしようもないミスを繰り返す俺の数十倍は出来る奴だと思うし、実力ももちろんあるけれどそこを見込まれて、硬式は初心者ながら副キャプテンに抜擢されたようなものなのだから。そんなこいつが不注意からのミスをするなんて、かなり珍しいことだ。

「雪谷坂野に対して妙に優しくねぇ？　俺が伝達ミスったときはすげぇ馬鹿にしてきたくせに」

「普段の行いの違いに決まってんだろ。お前に情状酌量の余地はねぇよ」

「うっせ。で、どうする？」

そろそろ二年も集まる時間になってきて、こっちの話し合いをちらちらと伺っている様子が見える。問いかければ、「一緒に来い」と一言言って雪谷はその集団の方へ歩いていった。橋本がその後ろに着いていって、その背中を俺と坂野が追いかけた。

「軟式！　集合」

雪谷が声を掛けると、紫色のウィンドブレーカーの集団が雪谷の周りに緩く弧を描いて集まった。それを見て俺も硬式に、集まって雪谷の話を聞くように促した。坂野が軟式硬式の両方に顛末をかいつまんで説明し、さっき俺たちの前でしたように頭を下げる。坂野が上を向いたタイミングで、雪谷はまた口を開いた。

「つーわけで、うちか硬式かどっちか午後に練習ずらそうと思ってんだけど。軟式で、午後になったら出れねぇ奴何人いる？」

手上げろ、と雪谷は軟式に指示を出した。そろりと二人ほど手を上げるのが見えて、雪谷はそうかと呟いた。こっちに目配せしてくる雪谷の視線を受け流して、俺も硬式の面々に同じ質問をする。手をあげたのは六人だった。こっちの方が母集団が大きいのだから、人数が多いのも当たり前だ。

「じゃ軟式練習午後からにするから。二人には悪ぃけど」

「おい、ちょっと待て雪谷。ミスったの俺なのになんで軟式が時間ずらすんだ？　そっちのが人数少ないんだし、出れねぇ奴が少ねぇ

の当たり前だろ。んなことで軟式に迷惑かけるわけには」
あっさりと決めてしまおうとした雪谷を坂野が制した。それは俺も思っていたことだったから反論はしない。個人的な感情はどうあれ、軟式に迷惑をかけたのが硬式であることに代わりはない。
「んなこと言ってっからてめーらは弱ぇんだ」
雪谷の溜息が、冷たい空気の中で白く濁って形として見えた。あからさまに顔をしかめて、ズボンのポケットに両手を突っ込んで、口調は苛々したようだった。
「ミスしたのは坂野かもしれねぇけど硬式の奴等じゃねぇだろ。そうやって自分一人の責任感で下の奴等の練習機会奪うような義理の立て方してっからお前らは強くなんねぇの」
雪谷が当たり前のように語るその持論は、ひどく似合わないもののように思えた。言葉と口調こそ俺たちを完全に見下してはいるものの、結果がもたらす利益は俺たちのものだ。それは、意味もなく硬式を毛嫌いしている雪谷から出ると考えるにはあまりに不自然なものだった。けれど、好き嫌いに関係なくそう言える意思の強さがそのまま軟式のキャプテンとしてのそれなのだろうかと、ふと考えたのはそんなことだった。感情よりも損得と効率を重視出来るからこそ、雪谷は、軟式はここまで強くなったのかもしれない。
「申し訳ねぇと思うならいい加減にコート片しとけよ。ボールもごみも硬式のだろーが」
「ああ。ごめんな雪谷、助かった」
坂野が頭を下げたのは今日何度目か。軟式に頭を下げたい日なんてあるわけがないけれど、どう考えても今日はそうしないわけにはいかない。「軟式に礼言うぞ」と硬式の面々に声をかけて、雪谷ではなく集団に向かって頭を下げる。「ありがとうございました」。数十人分のその言葉を受け取っても、雪谷は顔色ひとつ変えなかった。ただ、両手をしまった横柄な態度を崩さないままに、俺たち硬式を斜めに見ていた。
「軟式解散していいぞ。午後もう一回ここ集合な」

それだけ言って、部員たちの返事を聞いてから雪谷はひとりで部室棟の方へ歩き出した。一年らしき数人が、ボールやラケットの籠を持ってその後を着いていく。ばらばらになる紫のウィンドブレーカーを眺めていたら、隣から坂野の溜息が聞こえた。それが安堵なのか軟式への罪悪感なのかは判断がつかなかったけれど、単純にこいつがこんな簡単なミスをすることが珍しいと思った。普段が完璧だからといってたまには失敗もあるだろうに、仕事はきっちりとする主義だから、俺たちが思っている以上に応えているのかもしれない。

「亮、あんま気にすんなよ。ユキが堅物なの今に始まったこっちゃねーし」

「おう、サンキュ。迷惑かけて悪かったよ」

「そんなこともあるって。じゃあ部活頑張れ」

一番最後までこの場に残っていた橋本も、坂野に声をかけてから手を振って雪谷たちが向かっていった方向に歩いていった。暫くそれを見送った後に、呆然としている部員に向かって俺は手を叩いて見せた。よし、とかけ声付きで。

「急いで準備して部活始めんぞ！　今日は最初っから試合やるから、準備終わったらオムニコートに集合な」

はい。返事をして一年は諸々の荷物を持ち上げた。今にも解散しそうな寸前、ひとつ思い出してしまった。もうひとつのコートに走っていこうとする奴等を呼び止めて、追加の一言。

「コートのボールとごみ、ちゃんと拾ってまとめといてくれ」

意地でも言わないと思い続けてきた言葉ではあったけれど、今日に限っては言わないわけにもいかなかった。

「あれ、今硬式の時間なの？」

部活を始める準備をしている一年生を、コートのフェンスに寄りかかって眺めていたら後ろから声がした。それは聞き覚えのあるトーンで、振り返ればフェンス越しに軟式の紫色が見えた。さっきの

紫の中にはいなかった姿が、俺の後ろで首を傾げていた。
「初瀬？」
「今日は午前だっていうから見に来たんだけど、間違ってた？」
「あ、いや……」
ちょっと手違いがあって、と手短に説明すると、初瀬は「ふうん」と一言発してその話題を終わらせた。準備をする一年生をちらりと覗いてから、初瀬は俺の後ろを見て「あ」と声をかけた。
「坂野くんだ」
「あ、初瀬か。軟式見に来た？」
「うん、顔だそうと思って」
「悪ぃな」
「ううん、そんなこともあるよ。ガヤどこだかわかる？」
初瀬の問いに、「部室棟か校舎の方行った」と坂野が答える。初瀬は「そう」と一言言ってそちらを見遣った。その姿に覚えたのはほんの少しの違和感だった。何かが足りない気がする。それが何であったかうまく思い出せないのだけれど、初瀬の姿がいつもより細く見えるようなそんな錯覚に陥る。着ている初瀬には見慣れない紫色のせいなのかもしれないけれど、それでも。
「あれ、初瀬」
「ん？　なに？」
「お前、松葉杖は？」
違和感の正体に先に気が付いたのは坂野だった。初瀬の両脇にいつだって抱えられていた存在感のある金属性の器具が今日は見あたらない。初瀬はそれを指摘されて、嬉しそうに微笑んだ。松葉杖の代わりになっていたのは、手に握られた一本の細い杖だけだった。
「よくなってきたんだ、もうすぐ何もなしでも歩けるようになるって」
「そっか、よかったな」
「うん。春になる前には復帰したいなって」
ガヤが待ってるから。そう言って笑った初瀬は、いつもより数段

幼く見えた。敵意を抱かせない無邪気な笑顔は、雪谷のそれとは正反対だ。初瀬は空を仰いだ。来る時には青かった空は、次第に雲に覆われ始めていた。それを見て、初瀬はまた違う種類の笑みを浮かべた。悲しそうで寂しそうで、それでもどこか嬉しそうな、何種類もの笑顔がまぜこぜになって、それでもやっぱりそれは笑顔だった。日本酒にワインを混ぜたところでアルコールであることに変わりはないのと同じだ。それがカクテルになるのか毒に近くなるのかという違いはあるけれど。

「今日はね、雪の予報なんだ」

そう呟いて、初瀬は俺たちに背を向けた。答えは待っていなかったのだろう。振り返って、「部活頑張ってね」と一言手を振って歩いていった。小柄な初瀬の後ろ姿に、紫色はどうにも派手すぎるように思えた。

ノイズ混じりの曇り空（後編）

「晴也、ゲーム終わったぜ」
部活中、数日前からやっている試合の結果を見直していたら、前から声がした。試合が終わったら報告に来いと言っていたからそれだろう。「相手とカウントは？」と聞く準備をしてから顔を上げたけれど、足りないものに気が付いて言葉を飲み込んだ。
「坂野は？」
目の前にいたのは坂野のダブルスペアひとりだけだった。ダブルスの場合結果報告は二人揃って来るように、と常々言っていたにも関わらずだ。そいつは「さあ」と肩を竦めて、「試合終わったらどっか行っちまった」なんて無責任な言葉を発する。曲がりなりにもペアだろうと言おうと思ったけれど、シングルス専門の俺がペアのことに口を出すのも無粋だ。
「相手とカウント」
「星野んとこに２－６で負けた」
「……は？」
リーグ表を辿って、メモをしようとした手が止まる。こいつと坂野のペアは、硬式のダブルスの中では一番手か下がったとしても二番手だ。その実力も坂野は副キャプテンをやっている理由のひとつであるわけだし、そうだというのにそれはあまりにもあり得ない結果だった。特に調子が悪いという話は聞いていなかったし、リーグ表の他の所を見ていても勝利を意味する丸が並んでいる。今日に限って、なのだろうか。
「なんかあったの、珍しいじゃん」
「なんかあったっつーか、よくわかんねぇけど」
返ってきた微妙な返事に眉をひそめたところで、坂野がコートのドアを開けるのが見えた。呼び止めるとはっと気付いたようにこっちに走ってくる。「報告一緒に来いって言ってるだろ」と注意した

ら、素直に謝られた。
「お前今日どうしたの？　朝のことまだひきずってんのかよ」
「いやそういうわけじゃねぇけど……」
「もう忘れろってあんなの。雪谷も橋本も許してくれたんだからもういいじゃん」
「まあ、そりゃ」
一言ひとこと、なんだか歯切れが悪い。坂野は首からかけたタオルに顔を埋めて、「あー」と意味の無い声を上げた。逡巡するようにこっちを見てから、はあと息を吐く。
「なあ、ハル」
「なに？」
「シングルスやってくれねぇか」
それはひどく予想外の注文だった。坂野とシングルスをしたことがないわけではないけれど、坂野はほとんどダブルス専門だからなかなか機会もないし、シングルスをやりたがる特別な理由があるとも思えない。まあ、それでもやってみたくなることもあるのかもしれないと、俺はベンチから立ち上がった。最近調子は悪いとは言え、二番手三番手にはまだ負けていないからシングルスの順位は変わらない。だから、暇と言えば暇だから断る理由もなかった。
「どういう風の吹き回し？」
「や、ちょっとお前と試合してみたい気分」
「ガチでやんの？」
「頼むよ」
結果をまとめるのを坂野のペアに任せてから、さっきまで坂野たちが試合をしていた空きコートに二人で入る。何ヶ月ぶりだろうか。夏休みに、ほとんど遊びみたいに何度かやったのが最後だったような気がする。キャプテン対副キャプテンの試合は、今のところ俺の全勝だ。一応、メンツは保っている。
ダウン、を宣言した坂野がラケットを拾い上げて、「裏だ」と返してきた。

「サービスもらうぞ」
「はいよ」
拾い上げた足下のボールをネット越しに坂野のラケットに乗せてから、ベースラインに向かおうとする坂野を呼び止めた。坂野は、ラケットの裏面でボールを弾ませながら振り返る。
「勝ったらアイス奢って」
サービスラインからサービスラインの距離で、坂野が笑うのが見えた。それは今日は初めて見た表情だった。
「不公平すぎねぇか、それ」
そう言って肩を竦めて、坂野は俺に背を向けた。

「ゲームセット」
ネットにボールが吸い込まれる音がしてまもなく、審判の声が聞こえた。カウントを聞くまでもない。坂野はベースラインの上に棒立ちになったまま、そこから動こうとしなかった。
「坂野、」
コールが聞こえて、審判が審判台を降りる前に坂野の前に駆け寄った。観ていた奴等までなにも言えずに固まる空気の中、坂野は俯けていた顔を上げて、自嘲とも諦観とも取れる笑みを浮かべて俺の方を向いた。
「ごめん、ハル。わざわざ付き合ってもらったのに、こんな試合して」
こんな試合。そう坂野が形容したとおり、カウントは６－０。大事なところで何度もミスを積み重ねた坂野にはほとんど流れが回ってこないまま、試合はあっという間に終わってしまった。それは、俺なんかより遥かにプレッシャーに強い坂野にしてはひどく珍しいことだった。的確なストロークで相手を崩していくことを得意とする坂野が、自分からミスをして攻め急いで崩れていく。カウントというよりも、あまりに「らしくない」試合展開であったことが気にかかった。

「なんか原因あるならはっきり言え。なくてこうなら、ちょっと休めよ。疲れてんだろ」
坂野は俺の顔を見て、一瞬逡巡したように眉を寄せてから、唇を開いて大きく息を吐き出した。それからゆるゆると首を横に振って、「わかんねぇ」と一言呟く。それが俺の言葉に対する反応だったのか、自問自答への答えだったのかはわからない。心配そうにかけよってくるペアには一瞥もせずに、坂野はもう一度口を開いた。
「ごめん、ハル。ちょっと頭冷やしてくる」
そう言って回れ右、ベースラインを踏み越えてコートを出て行く坂野の後ろ姿に、つい数ヶ月前の自分の状況がフラッシュバックした。俺は、あいつに気の利いた言葉ひとつもかけてやれない。そのことがひどくもどかしい。
重い灰色を増した空に気が付いて見上げたら、コートの向こう側から「あ」と短い声が聞こえる。声を発したそいつが宙に向かって手のひらを向けているのが見えて、同じように真似をしたら首元に冷たい感触。それは液体ではなくて固体の重みを孕んだ粒だった。部活が始まる前、なんとなしに初瀬が呟いた言葉を思い出した。「今日はね、雪の予報なんだ」。
今年初めて降った雪が、もやもやとしたマーブル色の気分に白のまだらを落とす。それが蟻地獄のように次々と中心に落とし込まれていくのを感じながら、仰いだ空に見えた白の粒は平面に並んだように静かに、それでも気が付けば俺の顔に落ちて冷たさを残していく。真ん中に溜まった雪はずっしりと冷たくて、喉元にせり上がっていたその重い感触を嚥下すれば、体全体に立った鳥肌に思わず身震いをした。コートに落ちた雪は、じわりと滲む。涙が瞳を覆う感覚と同じだ。
浮かんできてしまった笑みが、嘲笑なのか諦観なのかはやっぱり自分でさえわからなかった。
部活を終える時間になっても雪は降り止まず、寒さに身を縮めな

がら片付けをしていたら坂野がひょっこりと戻ってきた。大丈夫か、と問えば大丈夫だと返ってきたから、その言葉を信じることにして、ボールの籠を抱え上げた。コートに転がっていたごみを纏めた袋を捨てに行くよう一年に言いつけて、足でコートのドアを開けて外に出る。瞬間、見事に目に入った雪の冷たさに声を上げれば、坂野に笑われた。

「持つよ、ハル」

「いいよ別に。どうせ俺部室行くし」

「俺も行くから。部活抜けた詫びにちょっと仕事させてくれって」

「じゃあ」

手渡した黄色い籠を軽々と抱え上げて、坂野は俺の二歩前を歩く。だんだんと大きさと量を増す雪の粒に、軟式が部活が出来るかどうかが心配になってきた。こんなことを考えるのも今日が最後だといいと思うのだけど、譲ってもらったのに向こうだけ練習が出来ないのはさすがに申し訳ない。坂野も同じ事を考えたのか、空を仰いで「これ止むかな」と呟いた。

「止まなかったら、軟式に悪ぃな。待たせといて出来ませんでした、とか」

眉を顰める坂野に生返事で同意して、部室棟の階段を上る。古ぼけた建物の三階、奥から二番目の硬式テニス部の部室へ向かえば、そのもうひとつ奥のドアの前に人影が見えた。ドアの前のフェンスに肘を付いて、ぼんやりと外を見つめていたのは、降っている白い結晶と同じ名前をした軟式のキャプテンだった。水色を思わせる芯の強い瞳の焦点はは、どこを見るでもなく朧気に投げ出されている。それがわかるほどまでに近付いても、雪谷は俺たちに気が付かなかった。

「雪谷」

坂野が声をかける。ほんの少しのタイムラグを置いて、雪谷はこっちを振り向いた。驚いた風もなく、俺たちがここにいることはわかっていたとでも言いたげに、ゆっくりと頭を回す。もしかしたら、

とっくに気が付いていたのかもしれない。どちらであるかはわからない。「ああ」と声を上げて、雪谷は日に焼けて茶色がかった髪をかき上げた。
「硬式終わった時間か」
「おう。軟式練習出来そう？」
「やる」
懸念していたことへの返答はひどく短い一言だった。出来る出来ないではないその答え方が、俺たちと雪谷との差であるように感じられた。やる。意志を含んだその一言が、不可能を前提としない考え方が、きっと俺たちには足りない。
「そうか。今日は悪かったな、頑張ってくれ」
「別になんとも思ってねぇよ。引きずんな」
「サンキュ」
ふいと坂野から顔を背けて、雪谷はまた空を見上げる。灰色から降ってくる白を映す瞳は、どうにも向こう側の見えない色をしていた。なにもかもを跳ね返す、ピントのぼけた水色を浸したような黒が、磨りガラスのごとく雪を融かしていく。
俺は部室に入ろうとしたのだけど、坂野はそこから動かなかった。雪を見つめている雪谷を立ち止まったまま見て、坂野はもう一度雪谷を呼んだ。雪谷は今度は振り向かないままに生返事を寄越す。
「初瀬に会えたか」
その言葉に、雪谷はちらりと坂野を見た。それからまたすぐに顔を背け、「あいつならさっき帰った」と一言。「そうか」と呟いた坂野の声が、雪谷の紫色のウィンドブレーカーに跳ね返される。俺には、坂野が唐突にそれを聞いた理由がわからなかった。
ハル。呼ばれる声に気が付いたら、俺がくぐろうとしたドアを坂野が先にくぐっていた。慌てて部室に入って、スライド式のドアを閉める瞬間。ふと、気が付いた。そうしてようやく全てに合点がいった。初瀬の言葉と、雪谷の行動と、坂野の質問の意味。ああそうだ、だから今日が特別なんだろう。

――外に降っているのは、今年の初雪だ。

次の日、前日までの雪はすっかりやんで冬空は真っ青だった。もうひとつ昨日とは違うこととして、久しぶりに坂野が部活に来なかった。電話をしたら、小学生の妹が熱を出して家から離れられないのだと言う。

真面目なあいつは部活はほとんど皆勤だから、いないとなると不思議な気分がした。だけれど五人兄弟の長男はなかなかに忙しいだろう。それで副キャプテンとして、下手したら俺より仕事をしているのだからあいつはすごいと思う。だからこそ、最近調子が悪そうなのが心配だ。

一通り練習をこなして、部員とたわいもない話をしながら着替えて家路につく。それはいつも通りで当たり前のことであるのだけど、隣にいつもいる坂野がいないことに、やっぱり違和感がないわけがなかった。「坂野がいないとお前ひとりじゃ心配だ」なんてあちこちから言われて、俺に対する認識を再確認して少しへコんでみたり。だけれど、それは自分でさえわかっていることだからなにも言えない。

「晴也」

校門を出て少しの辺りで、声を掛けてきたのは坂野のペアだった。松本、とそいつの名前を呼べば、松本はラケットバッグの持ち手を握って微妙な表情を見せてきた。

「どうした？」

「あ、いや、さ。亮が最近なんか変なの、気になって」

「疲れてんじゃねぇのかな。今日も妹のお守りだって言ってるし」

「だよなあ。俺も、そう思う。大丈夫かな、あいつ」

やっぱり、ペアのことは気になるのだろう。眉を顰めた松本の肩を叩いて、「あいつなら大丈夫だろ」と笑ってみせる。ダブルスのことなんてよくわからないけれど、二人してぐだぐだと悩むのはきっといいことじゃねぇだろう、ってことはわかる。

「俺頼りねぇからさ、坂野の心労増やしてんのも俺なんだろーけど。だから、なんかしんどそうだったら支えてやってくんねぇ？　ペアだろ、お前ら」
「おう。ありがとな、晴也」
「ん」
笑って反対方向に歩いていった松本を見送って、俺も駅の方に向かって歩き出す。ダブルスなんて難しそうだし、俺には絶対出来ない自信がある。けれど、なにかあったときにひとりじゃないというのはダブルスの大きな利点なのだろう。それが、少しだけ羨ましくなった。

「あれ、」
もうすぐ駅が見えてくる交差点で、見かけたのは何度か目にしたことのある後ろ姿だった。信号待ちをするその背中に早歩きで近付いたら、向こうもそれに気が付いたのか、それとも俺が無意識に発した言葉を聞き取ったのか、俺の手が届く一歩半手前で振り向いた。
「あ」と短く高い声が上がる。
「ハルくんだあ」
間延びした語尾で俺を呼んだツインテールは、坂野の家の小さな長女だ。「由美ちゃん」と声をかけてから頭に何か引っかかるものを感じた。それが何だか考えていたら、脳裏に浮かんだ電話越しのあいつの声。「由美が熱を出したから」。あいつは、確かにそう言っていた。
「なあ、由美ちゃん」
信号は青になったけれど、膝を折って俺は小さな彼女に目線を合わせる。名前を呼べば、「なあに？」と丸い目をくるりと瞬かせて、無邪気な声で首を傾げる。兄に似ずに天真爛漫な妹に、何度かそうしたようにゆっくりと問いかけた。
「亮兄、今何してるか知ってるか？」
俺の問いに、彼女はぴょんと小さく跳ねてから笑顔で声を上げた。

「亮兄はね、おうちにいるよ！　由美がおうち出た時には、まだお寝坊さんでベッドにいたの」
「おうち出たのいつ？」
「さっき！」
そっか、と呟いて「ありがとう」を言えば、青から赤に変わった信号が、もう一度青になる。由美ちゃんは俺に手を振りながらそれを渡っていった。その姿に手を振り返して、屈めていた背を元に戻す。溢れたのは溜息だった。
坂野のことがわからない。そう、思ってしまった。あいつは自分のことをほとんど話さないから、あいつがどう考えていて何を悩んでいて、どうしてこんな行動をとったのかがわからない。部活に来たくない理由があったのなら、どうしてそれを言ってくれなかったのか。ただ疲れたから休みたいだけだったのならいいのだけど、もしも、もし何かあるのなら。そう考えてしまうと止まらなかった。あいつは、どうして俺になにも言ってくれないのだろう。坂野はいつだって俺の話を聞いてくれるのに、あいつは俺に自分のことを話さない。それがひどくもどかしかった。
青い空を仰いでから、携帯を取り出そうとポケットに手を入れたけれど、目当てのものはそこにはなかった。部活前にラケットバッグにしまいこんだそいつの存在を思い出して、だけれどどうにもラケットバッグからそれを取り出す気分になれなかった。降ろすだけの作業であるはずなのに、重たく感じてしまった。
結局俺はその日、坂野に電話もメールもする勇気が出なかった。

予定速度で急転直下

「あ、ハル。おはよう」
次の日、坂野は当たり前のように部室に一番乗りをしていた。いつも通り誰よりも早く来て準備をして、いつも通りの顔で、部室に置いた自分のノートパソコンを弄っていた。
「この前の練習試合で撮ったビデオ編集してみたんだけど、ＤＶＤ焼く？」
「え、ああ誰のある？」
「シングルスはお前と山本。ダブルスは谷川と瀬田のとこかな」
「俺の分観たい」
ラケットバッグを下ろしながら、坂野の言葉に返事をする。俺は昔から、（一応理系だというのに）電子機器の扱いがどうしようもなく苦手だ。だから、データのまとめもビデオの編集も、俺たちの代になってからずっと坂野任せだ。もっとも、それが坂野が副キャプテンな理由のひとつでもある。
「なあ、坂野」
かたかたとなるキーボードの音を遮って、坂野に声をかけた。機械音が鳴り止む。昨日のことを問い詰めようと口を開きかけたけれど、言えなかった。ただの疑問が、こいつを責める言葉になる気がして怖かった。坂野がやったことは、一切責められないことではないし、むしろ俺はキャプテンとしてこいつに厳しく当たるべきなのかもしれない。けれど、どうしても言葉にならない。
「ハル？」と疑問符付きで名前を呼ばれて、ついにどうしていいかわからなくなった。坂野はパソコンの前から腰を上げて、こっちを覗き込んできた。
「どうした、ハル？　なんかあったか」
眉をひそめる表情は、純粋に「俺のこと」を心配している顔だ。メンタルの弱い俺の感情の起伏を、こいつはいつもひとつひとつ拾

おうとしてくる。そのことを意識すると、余計に何も言えなかった。
「あ、いや。言おうとしたこと忘れちまった。思い出したら言う」
「ほんとか？」
「なんで？」
嘘をつくのは苦手だ。とぼけてみせたけれど、きっとわかられている。けれど坂野は「ふうん」と一言言って、それ以上は追及してこなかった。
「なんかあったら言えよ？」
「わかってるって」
「ハルは、すぐひとりで抱え込もうとすんだろ」
それは、俺だけのことなのか。言ってやりたかったけれどやっぱり言えなかった。俺のことはお前が聞き出してくるけれど、お前のことはなんだかんだで逃げる癖に。そう言って、問い詰めてやるべきだったのかもしれない。だけれど勇気がなかった。俺は臆病だ。そんなことは自分が一番よく知っている。
「……ハル、ビデオ今見るか？　まだ時間あるし」
坂野は薄く笑ってから俺の前を立ち上がり、またパソコンの方へ歩いていった。それから、マウスをかちかちと何度か弄って、俺に聞いてくる。
「あ、おう。見る。どの試合？」
「向こうのキャプテンとのやつ」
「うげ、負け試合じゃん」
０－４まで先制されてから必死に食らい付いたけれど、結局４－６で負けたその試合を思い出して溜息が漏れる。校外では最近とんと勝てなくて、数ヶ月前よりは多少マシだとしても、思うように伸びない、それ以前に足踏みしている状況は変わらない。それなのに未だ俺は部内で負けなしで、そうくると部活全体が心配になってくる。俺が強くならないと、硬式は強くならない。
「ハルは調子いいときは強ぇのに、崩れるのも早ぇよな」
「メンタルなんだよな。いいとこでこけるんだよ、いっつも」

本番に弱いのは昔からだ。一度流れを持っていかれると、そのまま大崩れしてしまう。中学時代はここまででもなかったのが、高校に入って、スランプの泥沼にはまってからはずっとそうだ。

坂野がいくつかフォルダを辿って、ダブルクリックでビデオを再生する。自分の後ろ姿から始まる試合に、この後の展開を思い出しながら目をやった。ああそうだ、ここで俺は前に出たところを思い切り抜かれた。

「アプローチ打って前出るとことか、最近上手くいかねぇんだよな」

「今のプレー？」

「そう。これも抜かれちまったし」

ふとその悩みを口にしたら、坂野は見ていたプレーを巻き戻して、俺の動きとボールを目で辿った。俺のアプローチショットがバウンドしたところでビデオを止めて、ボールの跳ねた位置を指で示す。

「短すぎるんじゃねぇかな」

「アプローチが？」

「おう。もうちょっと足下突くか、角度付けるかした方がいいんじゃねぇの」

多分、と坂野は最後に言葉を濁した。そのアドバイスは確かに正論だった。改めて指摘されると坂野の言うとおりで、俺が教える立場だったら、こんなところに打てとは言わない。坂野はすごい奴だと思った。軟式上がりとはいえ、硬式は初心者で入ってきてここまでなのだから、俺と同じだけ硬式をやっていたらきっと俺なんて敵わなかっただろう。軟式では、どれくらい強かったのだろうか。

「サンキュ、坂野」

そう声をかけたら、どうしてか坂野は目を丸くした。それから、気の抜けたようにふっと笑って、俺の頭の中身を読んだかのように言葉を発した。

「お前はすげぇよ、ハル」

それはついさっき俺がこいつに対して感じたことだ。だから、意味がわからなかった。俺が？　頭に疑問符が浮いたのは、別段俺の

頭が悪かったからではないと思う。その言葉は、あまりに今までの会話にそぐわなかった。
「俺が？　なんで？」
「お前は、誰の話でも真面目に聞くだろ」
坂野はビデオの再生ボタンを押さなかった。固まったコートの風景の前で、目を伏せて笑ってみせる。その意味もわからなかったから、「どういうことだ」と聞いた。坂野の指が、パソコンのキーから離れた場所で、きっと意味をもたないリズムを刻んだ。
「俺なんか硬式始めてまだ二年も経ってねぇのに、もう十年以上やってるお前に口出して、お前はそれちゃんと聞いてくれんだろ」
「自分がプレーできんのと、見ておかしいとことかこうすればいいってのわかるのとは違ぇだろ」
名選手が名コーチになるとは限らないし、その逆も然りだ。経験が浅くても技術が未熟でも、理論がわかっていれば教えることは出来るし、間違いを指摘することだって出来る。それはスポーツにおいて、しごく当たり前のことだと俺は思っている。だから、坂野がそのことで俺を「すごい」と言う意味は、やっぱりわからなかった。
「俺、お前のそういうとこ好きだよ」
坂野が浮かべた苦笑いのような表情の理由も、あいつの言葉は教えてくれなかった。

「っしゃラッキー」
相手の前衛の脇を、坂野のボールが見事に抜き去った。最近の中ではそれなりに調子もいいようで、積み重ねていた黒星を今日は次々に挽回している。この感じなら次の団体もここはレギュラー入りでいいかな、なんて考えながら見ていたら、走り込んで掬い上げた坂野のボールがサイドラインを割った。
「あれ、」
ふとフェンスの向こうを見遣ったら、ここ数ヶ月で見慣れてしまった姿が、それに寄りかかってコートの中を眺めていた。その真剣

な表情は、よくみるそいつのそれには似つかなくて、思わず声をかけるのをためらってしまう。初瀬は、ひどく真面目に坂野の試合を観ていた。

「初瀬？」

「……ああ、鈴木くん」

近寄って声をかけたら、初瀬はいつものようにやわらかい笑みを浮かべた。それからまた視線をボールに向けて、松本がコートの隅にボレーを叩き込むのをじっと見つめる。相手がぎりぎりそれに追いついて、ラケットに当てるだけの浅いリターンがコートに戻ってきた。弾かれたように走り込んだ坂野のラケットはなんとかボールに触れはしたものの、それは到底ネットを超える高さには辿り着かなかった。「ドンマイ」と声をかける松本に「悪ぃ」と一言だけ返して、坂野は素っ気なくベースラインまで戻っていった。

「ふうん、……ドンマイ、ねえ」

「初瀬？」

呟いた初瀬の声が、いつも以上に重たかったから一瞬どきりとした。初瀬の目が、飛び交うボールをゆっくりと追うのがわかる。初瀬には、何が見えているのだろうか。一度は頂点さえ見据えたその瞳の映すものは、きっと俺が見ている世界とは違う。俺とこいつとの違いは、そのまま俺と雪谷との違いだ。

「ねえ、坂野くんって硬式でもずっとダブルスやってるの？　今のペアの子と」

「え、ああ。去年からあいつとずっと組んでる、けど」

「そっか。鈴木くんはシングルス専門だっけ？」

「まあ」

ふうん、とまた生返事をして、初瀬は坂野がコートの端から端まで走り込むのを見て、追いついた脚と同時に振ったラケットが飛ばした綺麗なロブの着地点を見て、それから、相手の打ち損じたボールを、後ろに跳びながら地面に叩きつけた松本のスマッシュに目を細めた。それは決して当たりのいいボールではなかったけれど、べ

ースラインぎりぎり、相手の足下に落ちた。体勢を崩された相手はそれを返せずに、そこでゲームセットの声がかかる。勝ったにもかかわらず、松本の後ろに回り込んでいた坂野はひどく微妙な表情をしていた。溜息が、聞こえないまでも感じられる。

「あれ、初瀬」

コートから出て（結果報告のためだろう）俺を捜して辺りを見回したらしい坂野は、同時に初瀬の姿に気が付いてこっちにやってきた。松本も気になったのか、坂野の後ろをついてくる。「試合観てた？」と聞く坂野に、初瀬が頷いた。

「そっか。悪ぃな、情けねぇ試合してて。お前に観られんのは恥ずかしいわ」

「んー、別に君が情けないとは思わなかったけど」

けど。逆接で止められた言葉に続きがあることは、なんとなくわかった。初瀬は松本にちらりと目をやってから、坂野の方を向き直って小さく笑みを浮かべる。いかにも初瀬らしい、いわば無邪気な笑い方だった。だけれどそれの持ってきた感情は、決して安堵ではない。初瀬は時折そうやって笑うのだ。心臓の奥が、ほんの少しざわついた。

「こんなとこでこんなダブルスしてるくらいなら、君は軟式に来るべきだったよ」

初瀬の言葉は、辺りの空気をあっというまに冷やしきってしまった。その笑顔から飛びだしてきたのは明らかな「暴言」だった。思えば、こいつが硬式を悪く言ったのは、俺が知る限り初めてだ。松本が顔をしかめるのが見えて、坂野は肩を竦めて口を開いた。その唇から出てきたのは、初瀬のそれを上回る衝撃だった。

「ああ、俺もそう思うよ」

一瞬、坂野が何を言ったのかがわからなかった。初瀬は今さっきなんと言った？　坂野が、硬式で今のようにダブルスをやっていることを批判した。それを、今坂野は肯定したのだろうか。そうとしか思えない、それ以外の答えはない。背筋が震えたのは、きっと北

風が冷たかったからではなくて、坂野の浮かべた薄い笑顔の表情と、その言葉にだ。恐る恐る隣を見たら、松本が呆気に取られたように立ちつくしていた。

「もっとも、軟式に懲りたからこっち居るんだけどな」

「それでまだダブルスやってるんじゃ意味ないじゃん？　どうせ同じなんだったら、君の実力ならガヤの下に居た方が有意義だったのに」

初瀬のその言葉は、坂野に向かって言ったものだったはずだ。なのに、どうしてか泣きたくなるくらい思いきり俺のど真ん中に突き刺さってきた。否定してくれ。ラケットを握った右手に力が入るのがわかった。そりゃ、俺はあいつほど強くねぇし立派なキャプテンでもない。だけど、それでも。初瀬の言葉が指している内容を俺は知らない。それはきっと坂野と初瀬の共通認識で、俺の知らない坂野のことだ。そのことが余計に辛かった。どうしようもなく。

「それは、正論だ」

それは、誰よりもこいつの口からは聞きたくなかった言葉だった。なにもしていないのに、なにも言っていないのに心臓が早鐘を打つ。乾いたマメの出来た手のひらに、古くなったグリップが擦れる。その痛みを握りしめていないと泣き出しそうだった。なんで、なんでそんなこと。あいつより格下なのはわかってる、弱いのはわかってる。当たり前だとずっと諦めていたそのことを、これほどまでに悔しく思ったこともなかった。

初瀬はそのまま、くるりと踵を返してどこかに行ってしまった。それを完全に見送ったあと、松本が「なあ」と坂野に声をかける。その声が震えていたのは、怒りだろうか動揺だろうか。少なくとも、松本には坂野を問い質す権利がある。坂野もそれはわかっているのだろう。逃げも隠れもせず、自分のペアの顔を見た。

「どういうことだよ」

低い声が孕んでいたのは、どちらかといえば怒気であるようだった。「こんなダブルス」と形容されたことを肯定したのは坂野だ。

このまま坂野に掴みかかったとして、誰も驚かないほどきつく、松本は相方を睨み付ける。ただならぬ雰囲気を感じ取ってか、部員は皆動きを止めていた。二人を中心にコート全体が固まる。俺はきっと、あの時松本が坂野に殴りかかっていたとしても、止めることもできなかっただろう。

「……そのままだ」

「だからどういうことだって聞いてんだよ」

噛みつくような松本の問いに、グリップごと手を強く握って、坂野は地面に視線をやった。一度瞼を閉じてゆっくりと息を吐いて、何かに耐えるように坂野は自分の右腕を左手で掴む。

「わかんねぇか」

聞いたこともないくらい温度の低い声だった。坂野が、こんな声を出せることを初めて知った。無条件で背筋が粟立つ。一瞬怯えたように表情を変えた松本の瞳をしっかりと捉えた坂野の目も、見たことがない色をしていた。底冷えのするダークブラウンは、いつものような優しい色ではなくて、輪郭の浮き出た強すぎる光を呈していた。

「もううんざりなんだよ、お前と組んでんの」

無理矢理絞り出したであろうその言葉は、坂野がいつから我慢していたものだったのだろうか。それは、衝撃ではあった。だけれどそれで腑に落ちてしまった。どこか納得してしまった自分に気が付いたと同時に、自分のどうしようもなさも自覚してしまった。どうして、俺は気が付かなかった。

「っ、てめぇ、」

「お前のために走んのもお前のミスカバーすんのも、いい加減やってらんねぇんだよ。なんでボール追っかけようともしねぇの？　俺がお前の分まで走んの当たり前か？　取れるボール簡単に見逃して、なんで何も言わねぇの？　それで俺がボール取れなかったら、俺が悪ぃみてぇにするじゃねぇか」

堰を切ったように話し出した坂野の声は震えていた。もう一度俯

いてしまったその表情は見えない。きっと、見せたくないのだろう。誰もなにも言えなかった。声をかけなきゃ、止めなきゃ、と頭は思うのに。さっき、初瀬の言葉に頷いた坂野の姿が頭から離れなくて、坂野がようやく語ったこのことに気がつけなかった自分が情けなくて、結局言葉が出ない。

「お前と組んだ頃さ、俺硬式始めたばっかだったし、お前と実力なんか全然釣り合わねぇから何言われても言い返せなかったよ。でも、今だって俺がなんかお前に文句言うとお前すぐ不機嫌になんだろ、あの頃からお前ずっと、俺のこと見下したままだろ。俺はずっとお前に、軟式上がりの初心者だって思われ続けてんだろ」

松本も何も言わなかった。伺った表情は、怒りとも驚きとも取れる微妙な色のまま固まっていて、ひどく読み辛いものだった。木枯らしが音を立ててコートを通り過ぎる。それが聞こえるほどの異常なまでの沈黙に包まれて、坂野は息を飲み込んだ。右腕を掴んだ左手は震えていた。

悔しいまでに俺にはなにもわからない。坂野の言い分が正しいのか、それとも理不尽なのか、それすらも。ひとつのボールを二人で追いかけるということがどういうことなのか、俺には想像すら出来ないということをまざまざと突きつけられた。そこでようやく合点がいった。初瀬が俺が「シングルス専門」だと確認した理由。ああそうだ、あいつにはなにもかも見えていた。そうして、俺には見えてなかったことまでわかられていて、その理由もあいつは知っていた。――一年半以上こいつらを見てきた俺が、わからなかったことを。

「卑怯だろ、こんなの」

松本が絞り出した言葉はそれだけだった。だけれど、その意味は痛いほどに周りに突き刺さった。坂野のしていることは、ひどく卑怯な告白の仕方で、あまりに「らしくない」。松本はそれ以上反論もなにもしなかった。出来なかったのか、しなかったのかはわからない。それでも、謝りもしなかった。それは、坂野も同じだ。どう

すればいいのだろうか、俺はこの状況をどうすればいい、なにもわからなくてなにもできなくて、ただどうしようもない恐怖だけが巣くっていて。俺が何かしなければ誰もなにもできないのに、それでもどうにもならない。誰にも、収拾が付けられない。

「晴也」

ふいに、坂野が口にしたのは俺の名前だった。恐る恐る表情を見遣ったら、坂野は顔を上げて、申し訳なさそうな顔で、それでもほんの少しだけ笑っていた。それは自嘲のようで諦観のようで、俺にではなくて自分に向けられた表情であることは確かだった。俺は、返事が出来なかった。

「ごめん。……俺さ、多分、松本がどうとかそういうの抜いたとしても、ダブルスとか後衛って俺根っから向いてねぇんだと思うんだよ。そんで軟式辞めたんだ。そこでもうテニスと縁切っときゃよかったのに、な。ごめん、全部俺のわがままだ。最低な副キャプでごめんな、晴也」

何言ってんだ、ふざけんな、二人で話し合ってとっとと仲直りしろよ馬鹿。そんで、全部解決してから迷惑掛けて悪かった、って謝りに来い。なあ、そうだろ坂野。それでいいだろ、それで全部うまくいくはずだろ、なあ。――なんて、言えなかった。きっと坂野は、ずっと思っていたのだろう。俺がおかしいと思い始めるよりもずっとずっと前から、誰にも言わないで、だって言ってしまったらこうなるとわかっていたから。きっと相談されていたところで、俺にはどうにもできなかっただろう。それがあまりにも明確にわかってしまったから、俺には坂野を責める術がなかった。自分の無力さがつくづく嫌になる。あいつだったら、あいつらだったらどうにか出来ていたのだろうか。こうなる前に。取り返しが、つかなくなる前に。俺みたいに、なにも出来ないキャプテンじゃなかったら。

「軟式、戻りてぇの」

聞けたのはそれだけだった。坂野は小さく首を横に振った。「今更だ」と答えはそれだけだった。

「辞めんのか、坂野」
「お前が、いいって言えば」
それだってひどく卑怯な言葉だ。言えると思ってんのか馬鹿野郎。だけど、だけれど。それは俺の私情だ。なにもわからない。ただ、ひとつだけ確信したのは、今ここで答えを出すには俺はどうしようもなく力不足だ、ということだけだ。
「どんな形でも、残る気ねぇのか」
「ああ。いい加減懲りた」
「……そっか」
そこまで言われてしまって、俺に止める権利はあるのだろうか。なんを考えても、答えは「わからない」だ。思考回路があちこちでショートを起こして別のコードと繋がって、もはや何がどこに繋がっているのかさえ曖昧になってそれでうまく働いてくれるわけなんかもなくて、ぐちゃぐちゃなった頭の中は、明確な答えひとつ返すことが出来ない。そのもどかしさに泣きたくなった。もう既に、泣きそうだ。
「ちょっと、考えさせて。なんもわかんねぇや、今。悪ぃ」
坂野が頷くのが見えた。それから、もう一度「ごめん」の声が聞こえる。坂野は、立ちつくす部員の間を抜けてコートのドアに向かっていった。もうこいつは、二度とここに入ってこないのかもしれない。そう思うと、途方もなく怖くて苦しくてどうしようもなくなる。大切だった物が、当たり前にあった物が、俺のなによりも大切な居場所にいつだっていた存在がいなくなることが。あいつは、いつだって俺を支えていてくれたのに、俺は何も出来なくて、こんなに無力で、それが悔しくて。感じた怒りは誰にか、それすらわからない。
「坂野」
呼び止めたら振り向いた。目を見ることさえ怖かったけれど、冷たい空気を無理矢理肺に送り込む。あいつの右手がラケットを手放す瞬間なんて、俺は見たくないのに。それなのに。――この結果を

招いたのが誰かなんて、考えるまでもない。俺じゃなかったら、俺がもっとちゃんとしてたら。
「硬式、好きにしてやれなくてごめんな」
坂野の表情が歪むのが見えて、そのままあいつは何も言わないでコートを出て行った。それからどこに行ったのはわからない。けれど、戻ってこないのはわかっていた。
ラケットが手から滑り落ちる。喉が引きつるように痛んで、これ以上空気が入ってこない感覚にえづいたら、追い打ちのように嗚咽が襲ってきた。馬鹿みたいに脚が震える。誰かが名前を呼ぶのが聞こえたけれど、それすら曖昧で、崩れ落ちた地面の冷たさすらろくに感じられない。うまく呼吸の出来なくなった俺を抱え上げてくれたのが松本であったことに気が付いたら、また心臓が握りつぶされる痛みがやってくる。俺なんかよりこいつの方がしんどいはずなのに、いっぱいいろいろ考えて、押しつぶされそうになっているはずなのに、俺なんかがどうして。考えれば考えるほど息が出来なくなっていって、周りの景色もぼやけて灰色の固まりが視界を覆って、どうしようもない、ほんとうに、――どうしようもないくらい、俺は何も出来ない。出来なかった。そして、きっとこれからも。裏切られた気分だなんて、お門違いなのかもしれない。だけど、きっと俺に相談してもなにも解決しないことをあいつはわかっていた。俺が悩むだけで答えは出ないことを知っていた。だから、だからこんなふうに、なにもかわらないのは、あいつがどうしていたではなくて、俺が、俺がどうにもできないから、だから。
底なし沼のような自己嫌悪に陥ったときいつも救い出してくれたあいつを、俺は引き留めることすら出来なかった。ましてや、救ってやることなんて。
「晴也っ、おい、落ち着けよ、晴也、」
うっすら聞こえる声に、大丈夫だと返す言葉はどこからも発されなかった。大丈夫でいなきゃなんねぇのに、どうして俺が。なにもできなかったしてやれなかった、俺なんかが。

これほどまでに死んでしまいたいと思ったことも、初めてだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5639u/

快晴のち雪の空

2011年12月11日01時51分発行